カマド

北壁中央部に構築されていた。煙道部は、半円形状の緩やかな掘り込みである。袖部は、地山を計画的に削り残して、造り出されたものである。左袖部先端には、焚口部を構築した構材の一部と考えられる溶結凝灰岩の板状礫が埋め込まれていた。

カマド覆土は、にぶい黄褐色土（①層）、炭化物片を含むにぶい黄橙色土（②層）、パミス・ローム粒子を含む黄橙色土（③層）、黄橙色土（⑤層）、パミス・ローム粒子を含む暗褐色土（④層）、炭化物片・黄橙色土ブロックを含む暗褐色土（⑥層）である。

③層・⑤層が構材と思われる。⑦層は円形に掘られた掘り方を埋めたローム混入の黒褐色土である。

遺物

検出された主要遺物は、土師器坏・鉢・甑・甕、砥石、編物石である。

土師器坏には、稜を中央部に有し、口縁部が直立する須恵器模倣坏（1）、稜を下部に有し、内面黒色処理が施されている坏（2）がある。1はⅠ区1層、2は焚口部から検出されている。

3はヘラミガキの施された土師器鉢である。Ⅰ区の3層と4層に破片が分布していた。

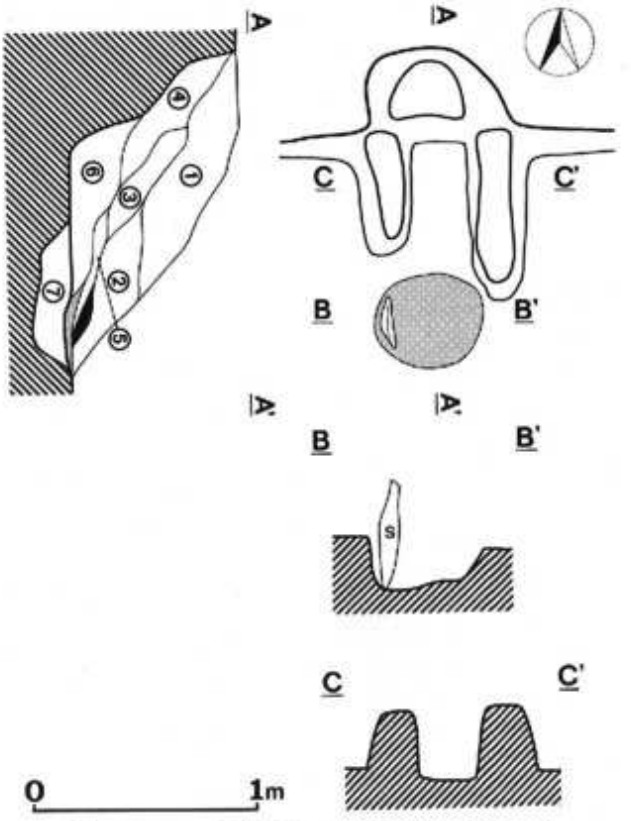
4は小形の土師器球胴甕で、住居中央の床面から検出されている。

5は台付甕の脚部破片で、出土位置はⅠ区1層である。

6は土師器甑の把手と考えられるもので、Ⅱ区床面から出土している。7は単孔の土師器甑で、Ⅲ区1層から検出されたものである。

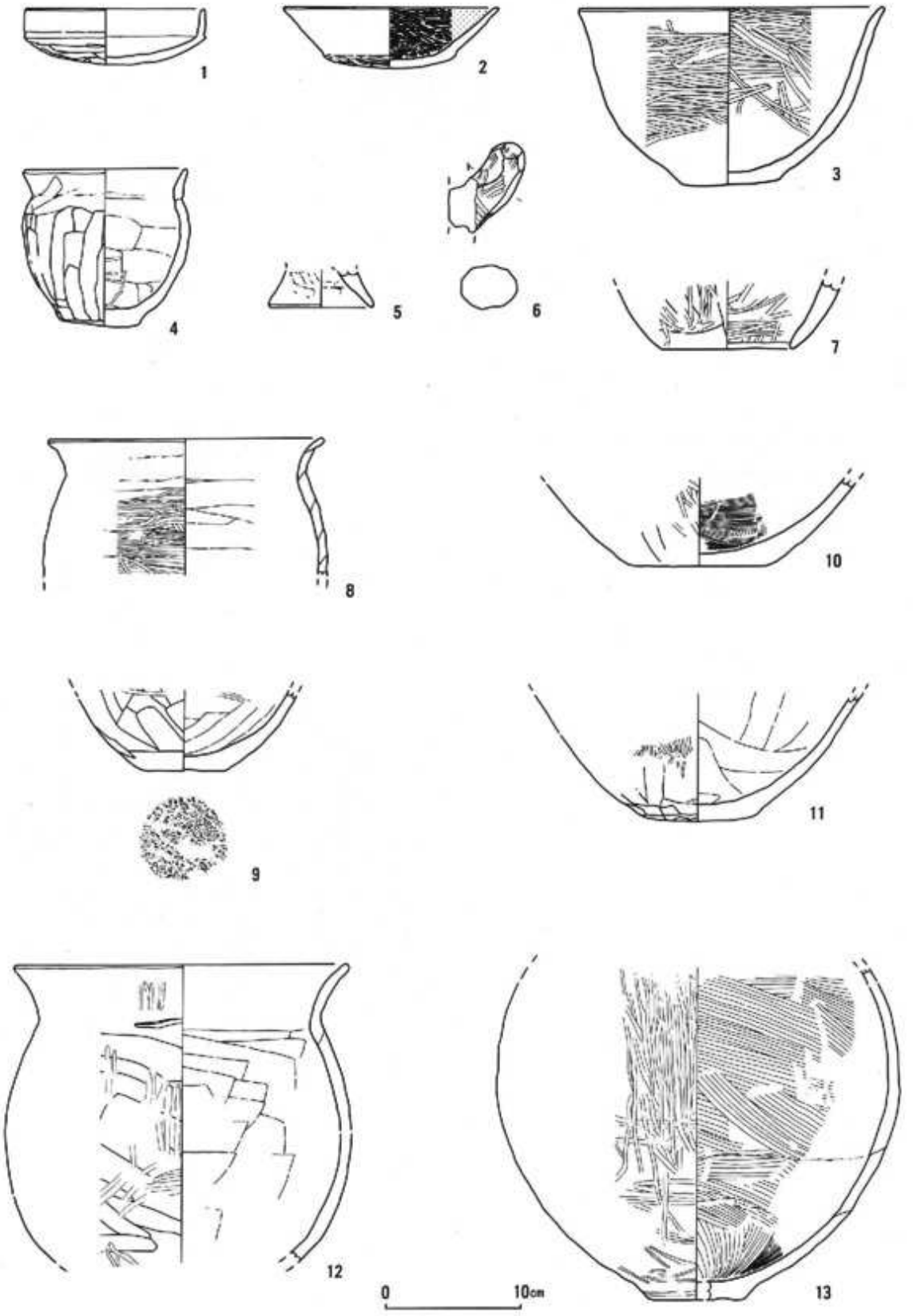
8～13は土師器球胴甕。14～16は土師器長胴甕である。8はカマド左脇壁際の5層から出土している。9は南壁脇の床面、11・14は住居中央の床面から検出された。13はカマド左脇壁際の5層から住居中央床面に破片の分布がみられた。15はカマド⑤層に破片が存在し、12はカマド⑤層からⅠ～Ⅲ区4層に破片が分布していたものである。16はⅡ区とⅢ区の4層、10はⅠ区の1層と2層に破片が分布していたものである。

17・18は楕円形の河原石で、編物石と思われる。

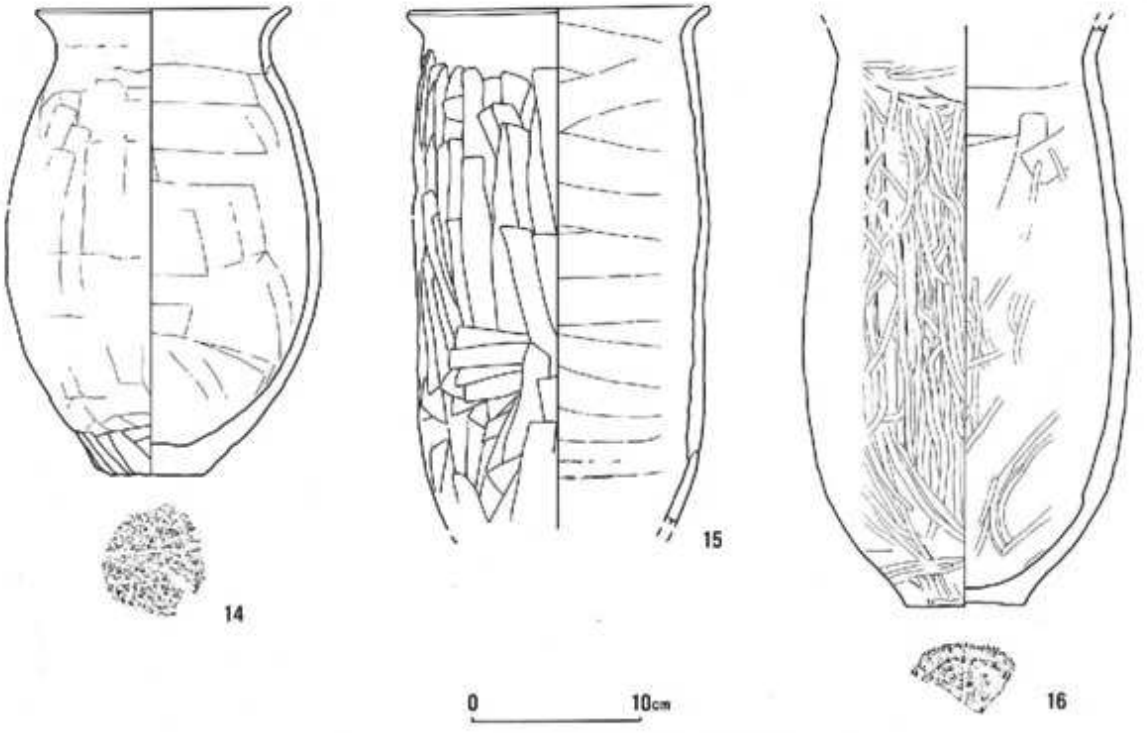


第72図　H16号住居址カマド実測図（1：30）

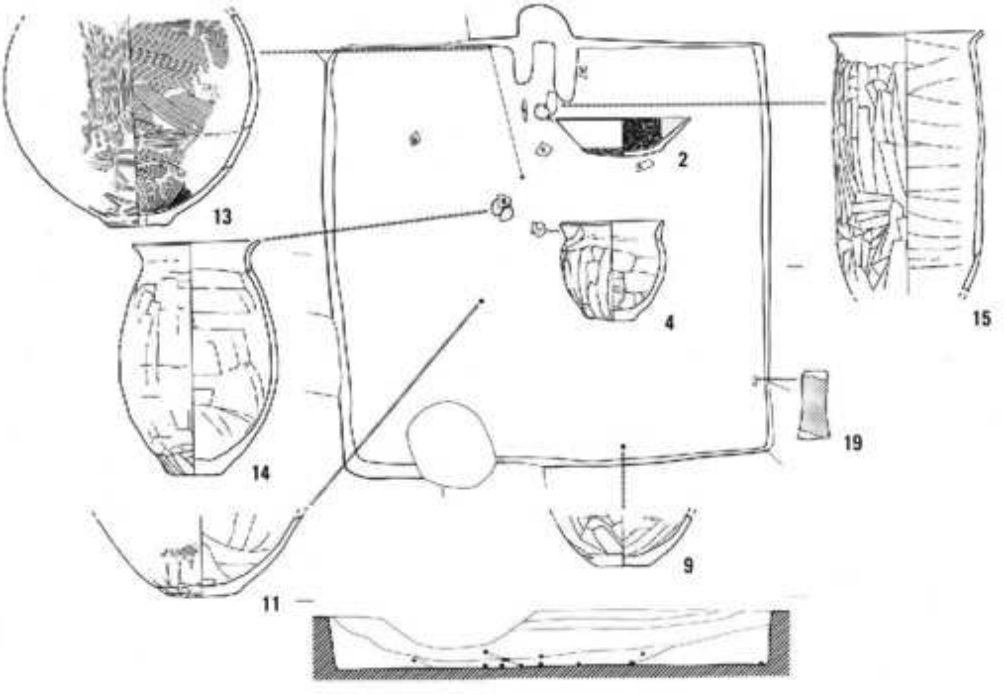
写真70　H16号住居址カマド



第73図　H16号住居址出土土器Ⅰ（1：4）



第74図　H16号住居址出土土器Ⅱ（1：4）



第75図　H16号住居址遺物分布図

共に4層中の出土であるが、分布は異なる。

19は砂岩製の砥石で、中央が窪む四面の使用面を有する。東壁脇の床面から検出されている。

H16号住居址から検出された土器群は、土師器坏・長胴甕・球胴甕の特徴と組成から、古墳時代後期の土器様相として捉えることができる。

表27　H16号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	土師器	杯	(13.3) (13.3) 4.2	口縁1/4 底部4/5	非ロクロ	内面：みこみ部ナデ・口縁ヨコナデ 外面：口縁ヨコナデ・底部ヘラケズリ	内面：5YR5/3 外面：5YR6/4 断面：5YR5/4	Ⅰ区1層	
2	土師器	杯	15.8 9.6 4.5	口縁4/5 底部完形	非ロクロ	内面：ヘラミガキ→黒色処理 外面：口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面:7.5YR6/6 断面：10YR6/4	カマド	
3	土師器	鉢	22.5 7.3 13.2	口縁3/4 底部3/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・体部～底部ナデ（刷毛状工具）→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ・体部ナデ（刷毛状工具）底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面：10YR4/6 外面:2.5YR5/6 断面:7.5YR5/4	Ⅰ区3・4層	
4	土師器	甕	12.1 6.0 11.7	口縁1/4 底部完形	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・胴部～底部ヘラナデ→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ→胴部および底部ヘラケズリ後部分的にナデ	内面：10YR7/3 外面：5YR6/4 断面：5YR6/6	Ⅱ区床面	
5	土師器	台付甕	— 〈7.8〉 〈2.7〉	脚部1/2	非ロクロ	内面：ナデ（刷毛状工具） 外面：ナデ（刷毛状工具）	内面:2.5YR4/1 外面:2.5YR5/4 断面:2.5YR6/4	Ⅰ区1層	
6	土師器	甑	— — —	把手	非ロクロ	内面：ヘラミガキ 外面：ナデ後ヘラミガキ	内面：5YR6/4 外面:7.5YR6/4 断面：5YR6/4	Ⅲ区床面	
7	土師器	甑	— (10.0) 〈5.1〉	底部1/4	非ロクロ	内面：ヘラミガキ 外面：ナデ後ヘラミガキ	内面:7.5YR6/4 外面：5YR6/4 断面:7.5YR7/4	Ⅱ区1層	
8	土師器	甕	(20.3) — 〈10.2〉	口縁1/5	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：胴部ナデ→口縁ヨコナデ→胴部ヘラミガキ	内面：10YR2/1 外面:7.5YR3/3 断面:7.5YR5/4	Ⅱ区5層	
9	土師器	甕	— 6.2 〈6.1〉	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ後ヘラミガキ 外面：胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：5YR4/3 外面:7.5YR3/3 断面:7.5YR5/4	Ⅳ区床面	木葉痕あり
10	土師器	甕	— (10.4) 〈6.1〉	底部1/2	非ロクロ	内面：刷毛目 外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：10YR8/3 外面:7.5YR6/4 断面：10YR8/4	Ⅰ区1・2層	
11	土師器	甕	— 8.6 〈9.5〉	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：10Y7/4 外面：10Y5/4 断面：5Y8/1	Ⅲ区床面	
12	土師器	甕	(24.6) — 〈22.1〉	口縁1/3	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面:7.5YR8/4 外面:7.5YR6/4 断面:2.5YR4/4	カマド⑤層 Ⅰ～Ⅱ区4層	
13	土師器	甕	— 〈7.2〉 〈24.5〉	底部1/2	非ロクロ	内面：刷毛目 外面：ヘラミガキ	内面：10YR7/3 外面：5YR6/6 断面：10YR8/2	Ⅱ・Ⅳ区床面 Ⅱ区5層	
14	土師器	甕	(15.0) 6.3 27.7	口縁1/4 底部完形	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部～底部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ナデ→底部外周ヘラケズリ	内面：10YR4/2 外面：5YR5/4 断面:7.5YR6/3	Ⅱ区床面	木葉痕あり
15	土師器	甕	17.8 — 〈31.0〉	口縁3/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面:7.5YR4/4 外面:7.5YR2/2 断面：5YR5/4	カマド③層	
16	土師器	甕	— 〈6.9〉 〈34.5〉	底部1/3	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部～底部ヘラナデ後ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ・胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：10YR7/3 外面:7.5YR7/3 断面:7.5YR7/2	Ⅱ・Ⅲ区4層	木葉痕あり

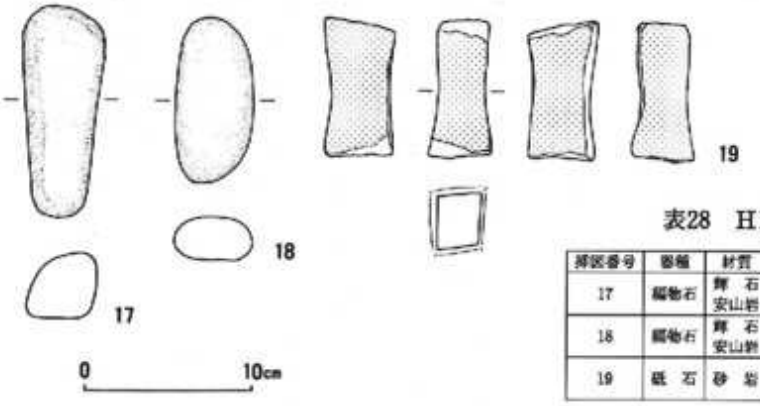


表28　H16号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
17	編物石	輝石安山岩	12.5	4.8	3.9	360	Ⅱ区4層	
18	編物石	輝石安山岩	9.8	4.6	2.6	190	Ⅰ区4層	
19	砥石	砂岩	8.3	3.8	4.2	180	Ⅳ区床面	

第76図　H16号住居址出土石器（1：4）

1

2

3

4

8

7

9

11

12

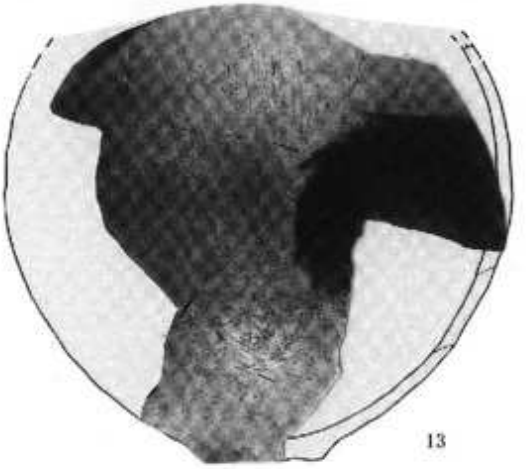

13

写真71　H16号住居址出土遺物Ⅰ

14

15

16

19

18

17

写真72　H16号住居址出土遺物Ⅱ

(17) H17号住居址　　奈良時代

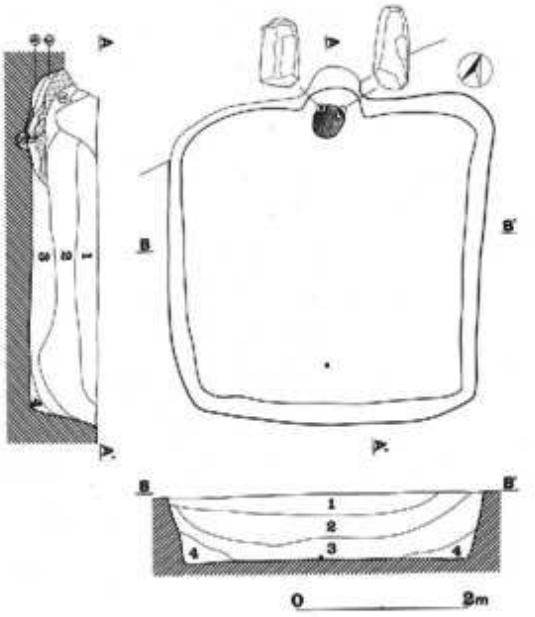
H17号住居址は、第Ⅰ区Kけ7グリッドより検出された。M6号溝状遺構によってカマド煙道部と北壁の上部が破壊され、攪乱によりカマド上部の堆積が乱されている。

平面形態は、南北3.8m、東西3.6mの隅丸方形を呈する。床面積は11.1㎡である。主軸方向はN—23°—Wを指す。壁は105度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は76～82cmと深い。周溝とピットは確認されなかった。

住居覆土は、暗褐色土（1層）、黒褐色土（2層）、パミス・ローム粒子を多量に含む褐色土（3層）、四隅の床面を埋めた黒褐色土（4層）の堆積である。

カマド　北壁中央部に構築されている。燃焼部は壁外にやや半円形状に張り出して設けられている。火床面には軽石を円柱状に加工した支脚石2個（左：長さ16.3cm、右：長さ19.4cm）が並存していた。火床面の掘り方は浅い皿状をなし、支脚石より手前に40×30cm、深さ20cm程度のピットが2個検出されている。覆土は、橙色粘土ブロック・ローム粒子を多量に含む暗褐色土（①層）、構材の橙色粘土の堆積、黒褐色土（②層）、炭化物片を含む灰黄褐色土（③層）、掘り方を埋めた黄褐色土（④層）・黄橙色土（⑤層）である。

遺物　遺物出土量は少なく、主要遺物は、八世紀第Ⅰ四半期の土器と思われる土師器高坏（1）がⅣ区1層、刀子破片（2）が南壁中央際の床面から出土したのみである。



第77図　H17号住居址実測図（1：80）

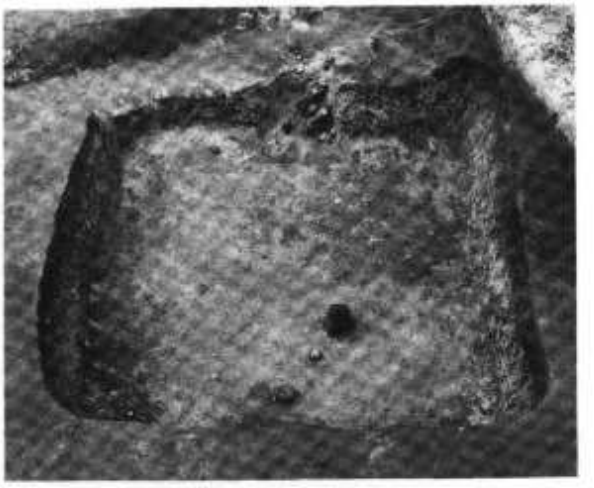
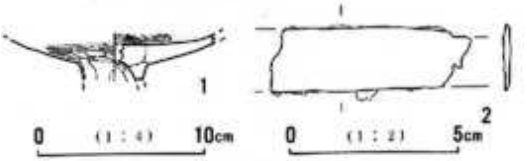


写真73　H17号住居址



第78図　H17号住居址出土遺物

表29　H17号住居址出土鉄器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
2	刀子	鉄	(5.9)	1.9	0.2	(4.3)	Ⅱ区床面	

表30　H17号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	土師器	高坏	— — (2.9)	底部1/3	ホロクロ	内面：坏部ヘラミガキ→黒色処理・脚部ヘラナデ 外面：ナデ→坏部ヘラミガキ	外面：7.5YR6/4 断面：10YR6/4	Ⅳ区1層	

(18) H18号住居址　　奈良時代

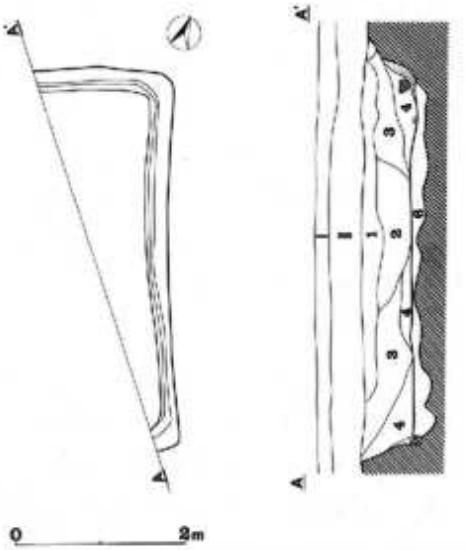
H18号住居址は、第Ⅰ区Qい1・2グリッドより検出された。主体は調査区外にあり、調査は東壁側の一部に止まった。

平面形態は、隅丸方形を呈したと考えられ、東壁で4.4mを測る。確認面からの壁高は46～56cmである。周溝は幅7～14cm、深さ4～8cmのものが巡っていた。ピットは確認されなかった。

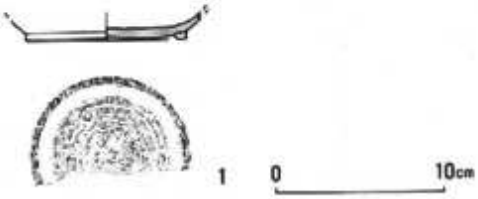
住居覆土は、黒褐色土（1層）、パミス・ロームブロックを多く含む黒褐色土（2層）、パミス・ロームブロックを多量に含む褐色土（3層）、壁際・床面を埋める黒色土（4層）、周溝を埋める黒褐色土（5層）の堆積であった。また暗褐色土を含むローム（6層）で掘り方を埋め、床面が形成されていたことが確認された。

カマド　調査区外であるがセクションで袖部等の構材と考えられる橙色粘土がみられた。

遺物　出土量は少なく、主要遺物は、Ⅰ区1層から出土した八世紀第1四半期の土器と考えられる須恵器高台付坏（1）のみであった。



第79図　H18号住居址実測図（1：80）



第80図　H18号住居址出土土器（1：4）

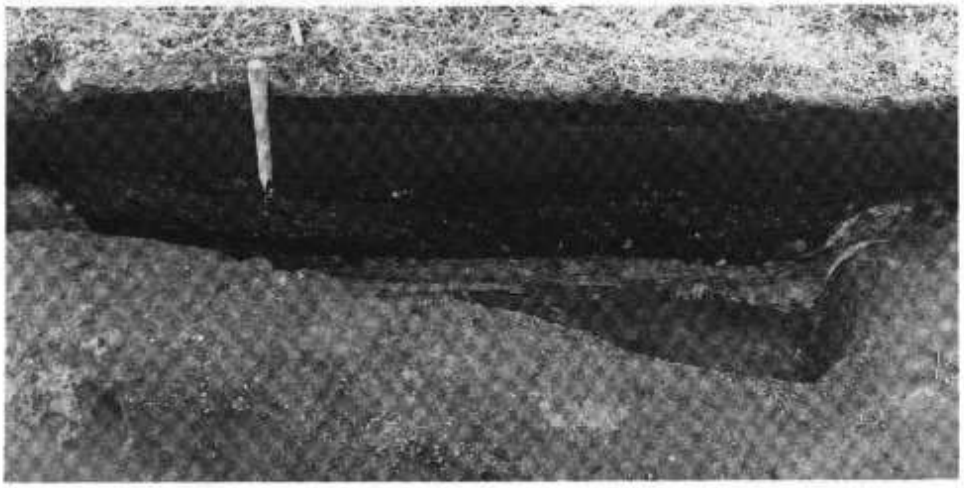


写真74　H18号住居址

表31　H18号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(9.6) (1.6)	底部2/3	ロクロ	・底部切り離し（切り離し方不明）・高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：N5/0 外面：N5/0 断面：N5/0	Ⅰ区1層	

(19) H19号住居址　　奈良時代

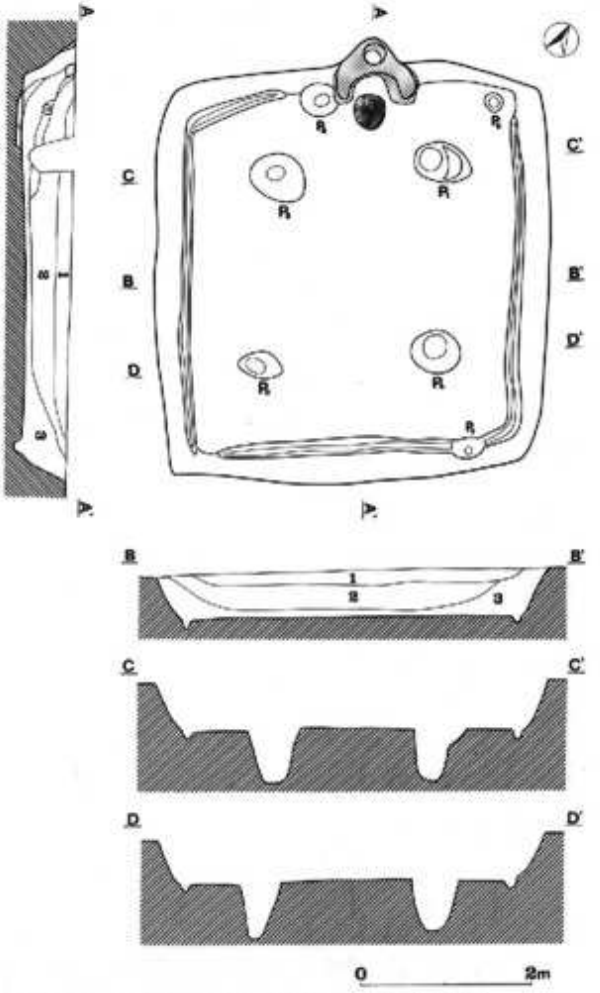
H19号住居址は、第1区Kき・く10グリッドより検出された。

平面形態は、南北4.9m、東西4.6mの隅丸方形を呈する。床面積は16.8㎡を測る。主軸方向はN－25°－Wを指す。

壁は115度程の緩傾斜で立ち上がり、僅かに内湾する。確認面からの壁高は58～64cmである。周溝は幅8～20cm、深さ2～10cmのU字形を呈し、北壁東側から北東隅・南西隅の一部を除く壁直下に認められた。

主柱穴は規則な配置にある4個（P1～P4）である。やや大形の掘り方で、P1は46×68cm、深さ62cm、P2は55×68cm、深さ63cm、P3は33×52cm、深さ66cm、P4は50×58cm、深さ60cmを測る。また、カマド左脇に接して38×44cm、深さ21cmのP6、北東隅に22×22cm、深さ12cmのP5、南東隅の周溝内に24×38cm、深さ23cmのP7が確認された。

住居覆土は3層からなり、1層は黒褐色土、2層はパミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土、3層は、壁際・床面を埋める黒色土である。



第81図
H19号住居址実測図（1：80）

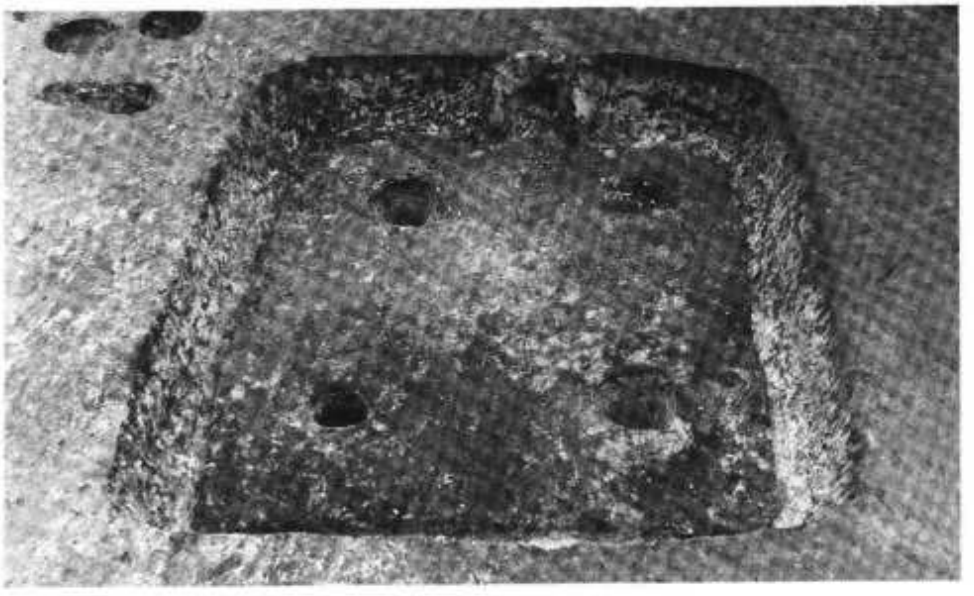


写真75
H19号住居址

カマド

カマドは北壁中央部に設けられていた。

橙色粘土で構築された煙道部・袖部・天井部の一部が残存していた。また、右袖部では軽石が補強材として据えられていた。さらに、カマドの構材と考えられる軽石の分布が、カマド前方の床面にみられた。火床部は楕円形状に掘り込まれた後、ロームを含む黒色土（④層）で埋め戻されていた。

覆土は、構材の橙色粘土が流出した状態を示す黄橙色土（①層）、住居覆土３層と同様な土層の堆積、橙色粘土ブロックを含む明黄褐色土（②層）、煙道部を埋める黒褐色土（③層）の堆積である。

遺物

検出された主要遺物は、須恵器蓋・坏、土師器坏・甕である。

１・２は須恵器蓋の破片で、共に１層から出土したものである。

３・４は手持ちヘラケズリで底部が調整された須恵器坏である。３はⅡ区２層、４はⅢ区３層から出土している。

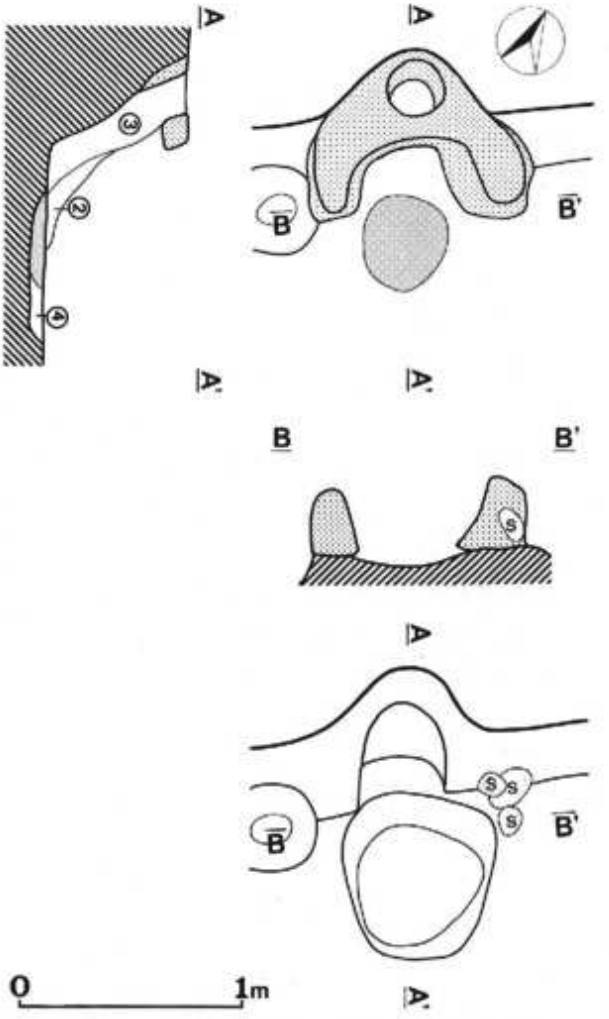
５は須恵器高台付坏の底部破片で、Ⅲ区３層から検出されている。

６はいわゆる畿内系暗文（口縁部に放射状暗文、みこみ部に三重のらせん状暗文）の認められる土師器坏で、Ｐ６内から出土したものである。

７は土師器小形甕の底部で、カマド②層から出土している。

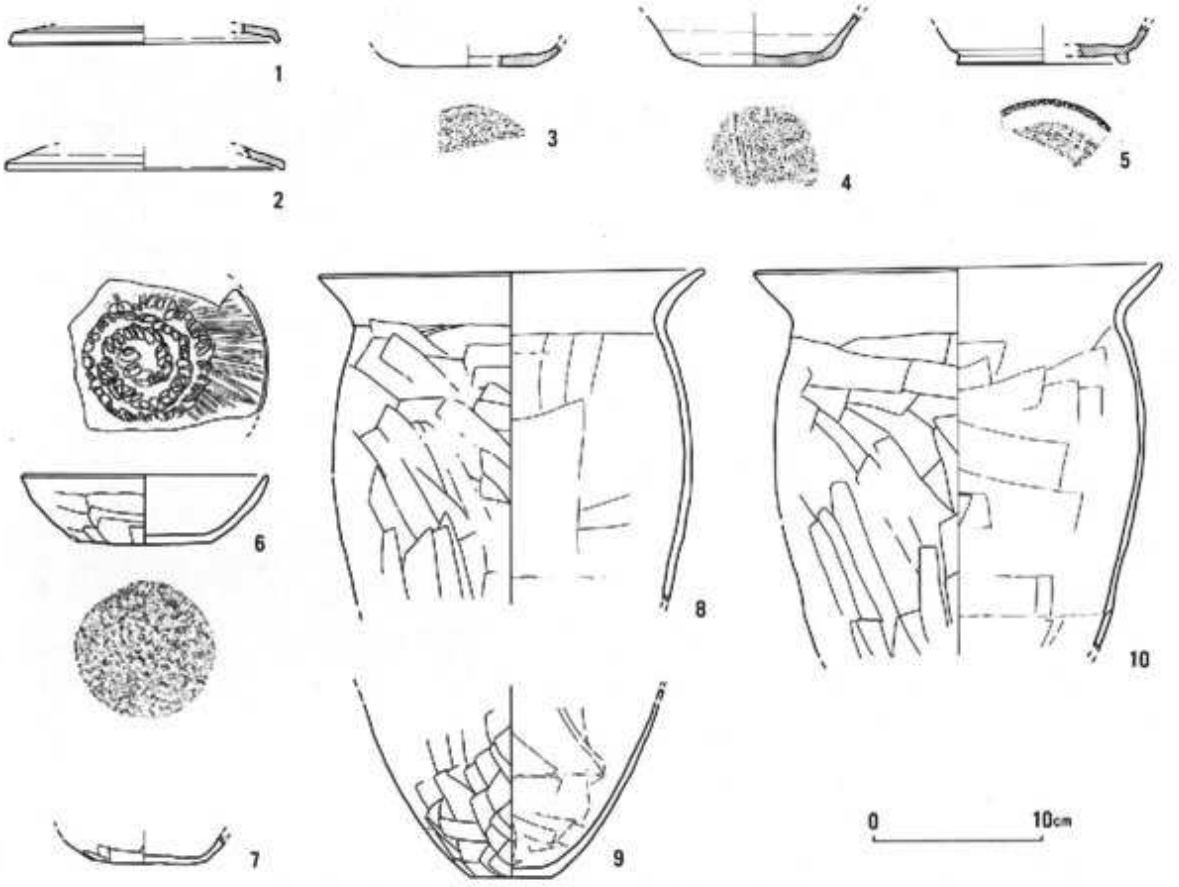
８・10は、口縁部が「く」の字状に外反する土師器長胴甕で、Ｐ２上面から潰れた状態で出土したものである。９は土師器長胴甕の底部で、Ｐ６上面から出土している。

H19号住居址から検出された土器群は、須恵器坏・土師器坏・土師器長胴甕の特徴と組成から、八世紀第Ⅱ四半期の土器様相と理解できよう。



第82図　H19号住居址カマド実測図（１：30）

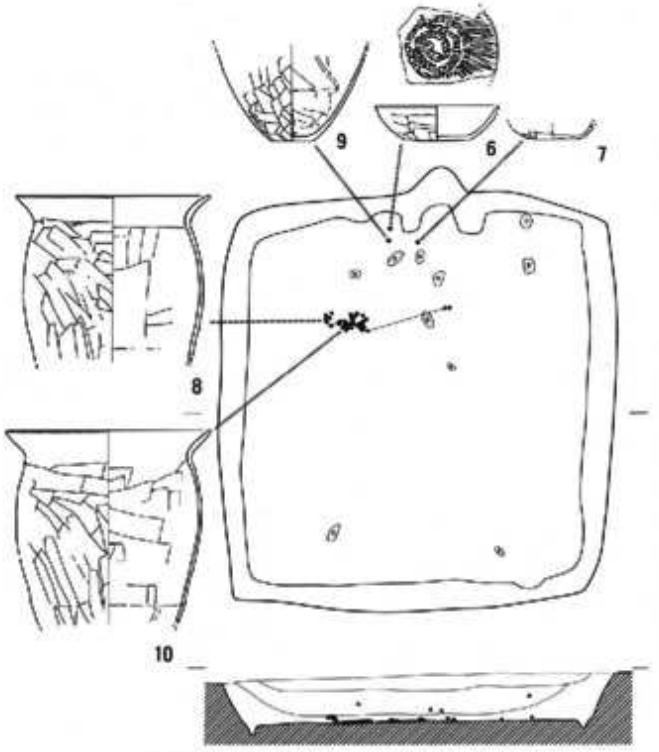
写真76　H19号住居址カマド



第83図　H19号住居址出土土器（1：4）

表32　H19号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	(15.9) — 〈1.1〉	口縁1/8	ロクロ		内面：N5/0 外面：N5/0 断面：N5/0	Ⅳ区1層	
2	須恵器	蓋	(16.4) — 〈1.4〉	口縁1/12	ロクロ		内面:7.5YR7/4 外面:7.5YR5/3 断面:7.5YR7/4	Ⅱ区1層	
3	須恵器	坏	— (8.0) 〈1.0〉	底部1/4	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面:7.5YR7/1 外面:7.5YR7/1 断面:7.5YR7/1	Ⅱ区2層	底部にヘラ記号
4	須恵器	坏	— (6.0) 〈3.1〉	底部2/3	ロクロ	→底部回転ヘラ切り 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面：N5/0 外面：N5/0 断面：N5/0	Ⅱ区3層	底部にヘラ記号
5	須恵器	坏	— (10.0) 〈2.2〉	底部1/4	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：N6/0 外面：N6/0 断面：N6/0	Ⅱ区3層	
6	土師器	坏	(14.5) 8.0 4.1	口縁1/6 底部完形	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・みこみ部ナデ→暗文（口縁部に放射状暗文・みこみ部に三重のらせん状暗文） 外面：口縁ヨコナデ→体部～底部ヘラケズリ	内面：5YR5/4 外面：5YR5/4 断面:7.5YR7/4	P6	縁内系暗文
7	土師器	甕	— 6.0 〈1.9〉	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：底部・外周ヘラケズリ	内面:7.5YR6/3 外面:7.5YR5/3 断面:7.5YR7/4	カマド②層	
8	土師器	甕	22.7 — 〈19.6〉	口縁完形	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR2/1 外面：5YR6/6 断面：5YR6/6	P2	
9	土師器	甕	— (4.8) 〈11.1〉	底部1/2	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ	内面:2.5YR4/4 外面：5YR6/3 断面:2.5YR4/4	P6	
10	土師器	甕	23.8 — 〈23.0〉	口縁3/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR4/1 外面：5YR6/6 断面：5YR6/6	P2	



第84図　H19号住居址遺物分布図

写真77　土器8・10出土状態

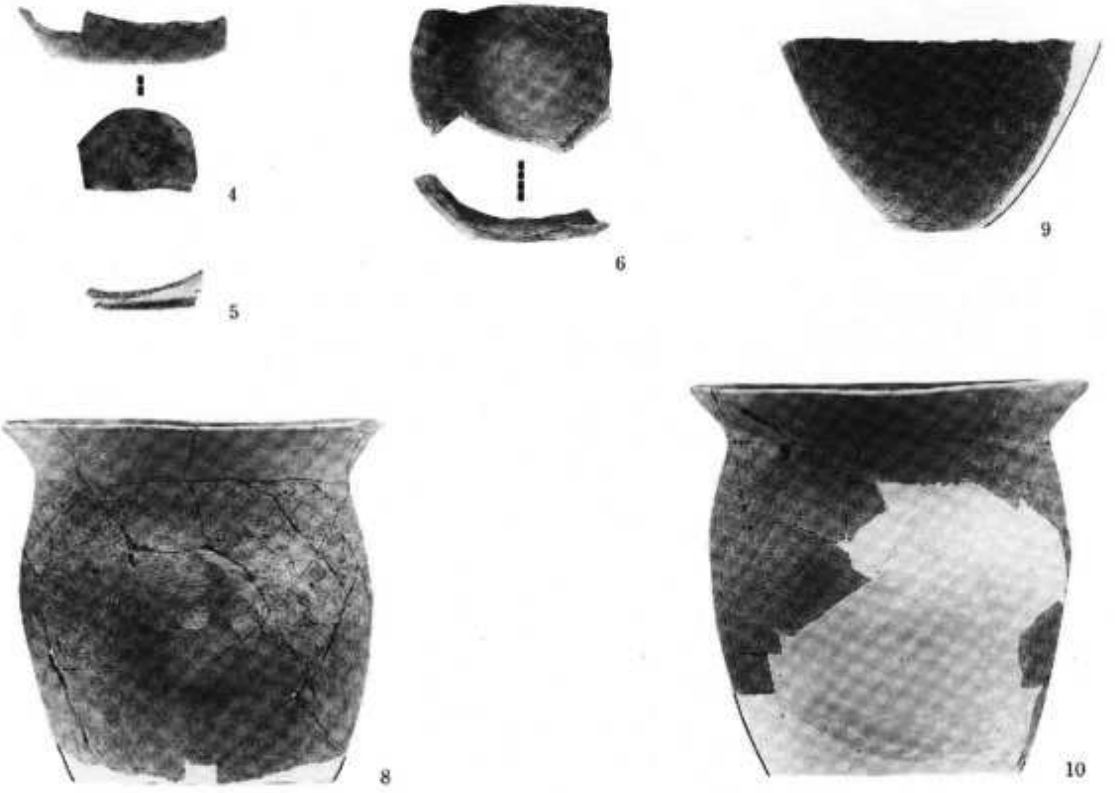


写真78　H19号住居址出土遺物

(20) H20号住居址　　古墳時代

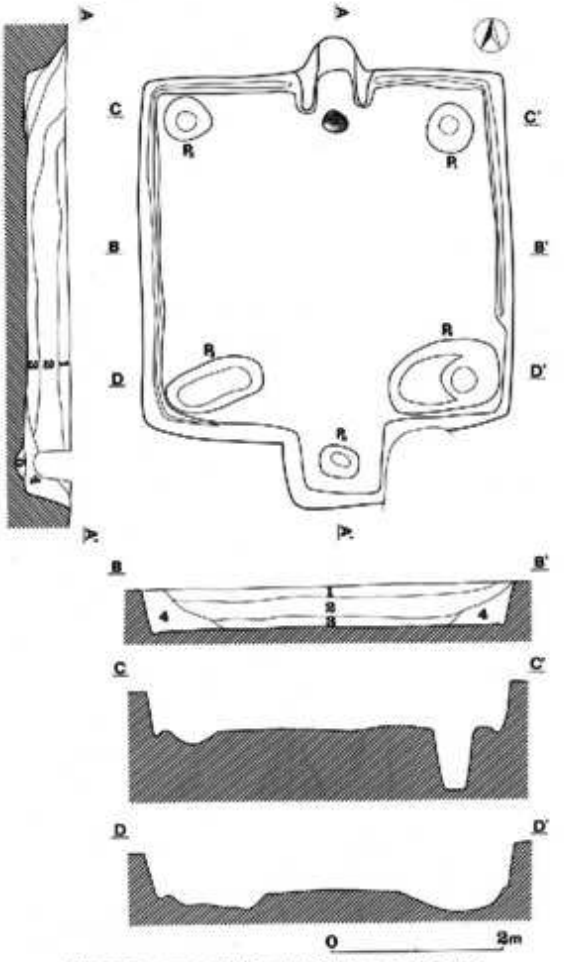
H20号住居址は、第1区Pお1・2グリッドより検出されている。張り出し部東側上部が、攪乱坑によって破壊されている。

平面形態は、南北4.4m、東西4.4mの隅丸方形呈し、南壁中央部に78×140cm程の張り出し部を有する。床面積は16.1㎡である。主軸方向はN－5°－Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は48～54cmである。壁直下には、南壁と東壁の一部を除き、幅5～14cm、深さ2～9cmの浅い周溝が確認されている。

主柱穴は四隅に4個（P1～P4）が確認された。P1とP2の掘り方は小形円形であり、P1が58×54cm、深さ73cm、P2が52×56cm、深さ15cmを測る。P3とP4の掘り方は大形楕円形を呈し、P3は56×118cm、深さ18cm、P4は81×130cm、深さ24cmの規模を有する。また、張り出し部に36×47cm、深さ8cmのP5が確認されている。

覆土は、1層がパミス・ローム粒子を多く含む暗褐色土、2層がパミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土、3層が暗褐色土、4層が壁際を埋める褐色土である。



第85図　H20号住居址実測図（1：80）

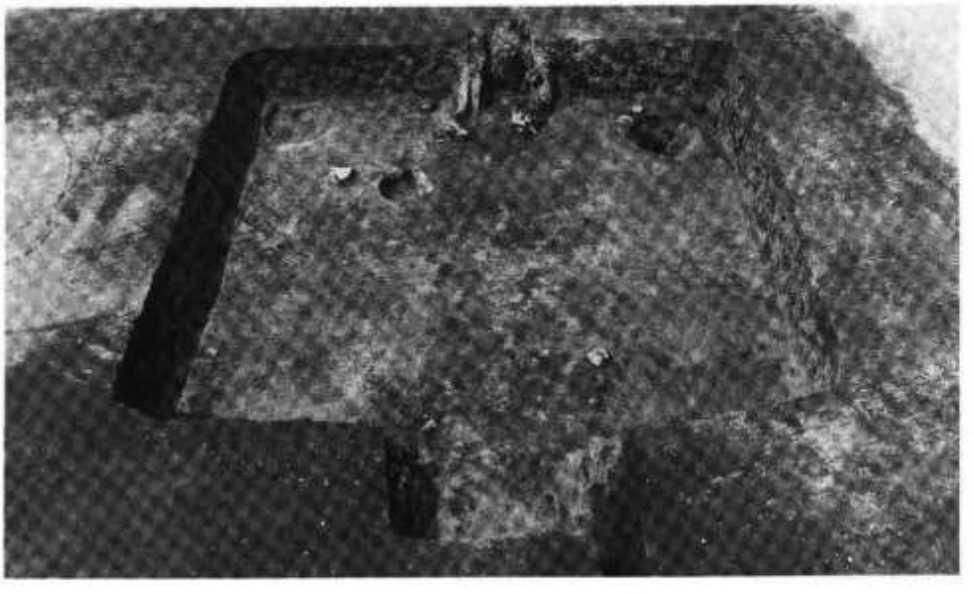
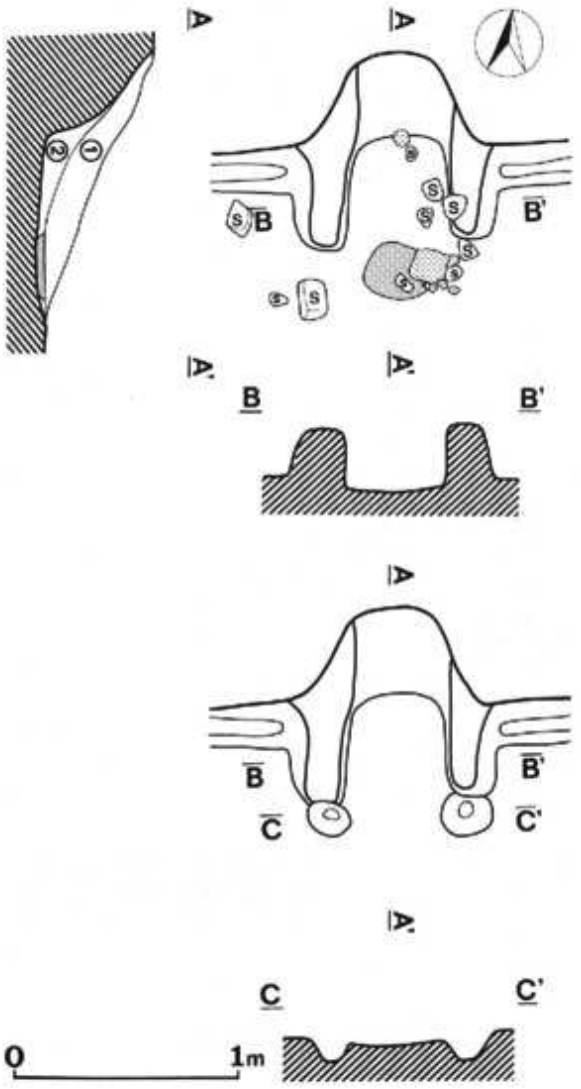


写真79
H20号住居址



第86図　H20号住居址カマド実測図（1：30）

写真80　H20号住居址カマド

カマド

北壁中央部に位置する。本時期のカマドの基本構造を示す半円形状に緩やかな傾斜で掘り込まれた煙道部、地山で造り出された袖部、両袖部先端の小ピットが確認された。ただし、面取りされた軽石の分布がみられ、構材に軽石が用いられた点が他と異なっていた。

覆土は、粘性のある褐色土（①層）、炭化物片を含む黒褐色土（②層）であった。①層が構材粘土の２次堆積であろう。

遺物

遺物の出土量は少ないが、主要遺物として、土師器坏・甕、編物石、敲石が検出された。

１はヘラミガキされた素口縁で丸底を呈する土師器坏である。２～４は底部近くに稜を有する土師器坏で、３・４には内面黒色処理が施されている。また、３の底部外面にはヘラ記号『十』がみられる。

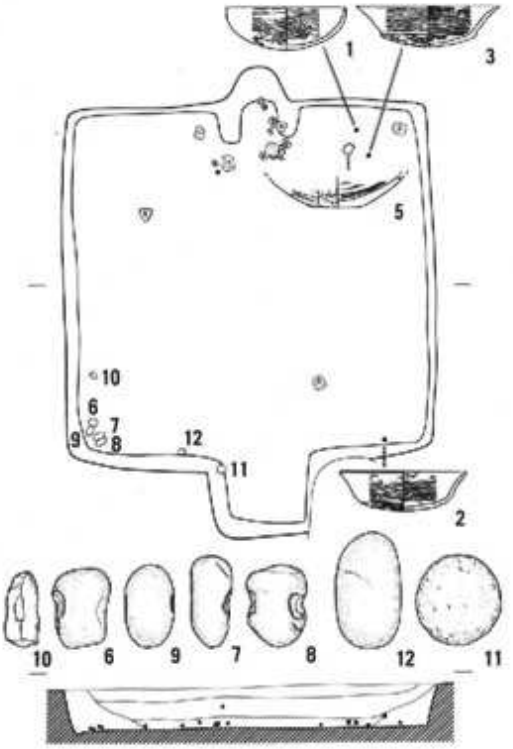
５は球胴形を呈すると考えられる土師器甕底部である。

１・３の土師器坏と５の土師器甕底部は、カマド右脇に分布し、１・５は４層、３はＰ１上面から検出されている。２の土師器坏は南西隅４層から検出され、４の土師器坏はⅡ区とⅢ区の３層に破片が分布していたものである。

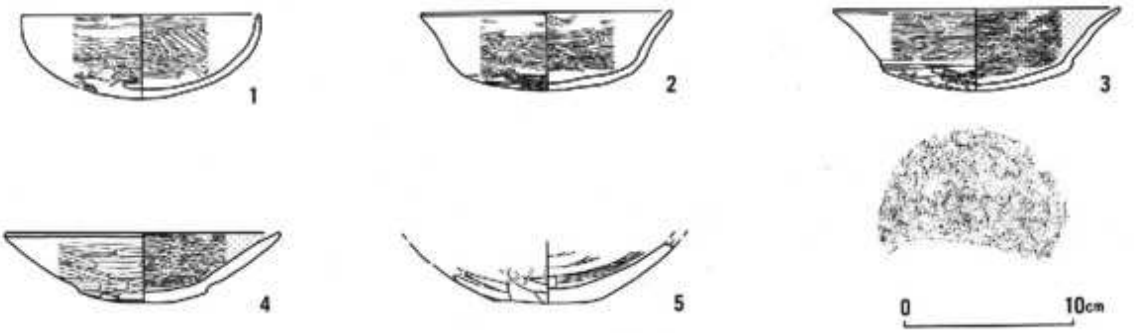
６～10は、編物石と考えられるものである。６・７は一側縁に、８・９は両側縁にノッチ部が形成されている。南西コーナーに分布範囲があり、６～９は南西隅に集中していた。

11・12は敲石である。11は南壁際の２層から出土した円形礫で、周縁の各所に敲打痕がみられた。12は南壁際の３層から出土した楕円形礫で、両端部に敲打痕が観察された。

本住居址の土器群は、土師器坏の特徴から古墳時代後期の土器様相と理解できる。また、住居形態も古墳時代後期に特徴的に存在する在り方を示している。



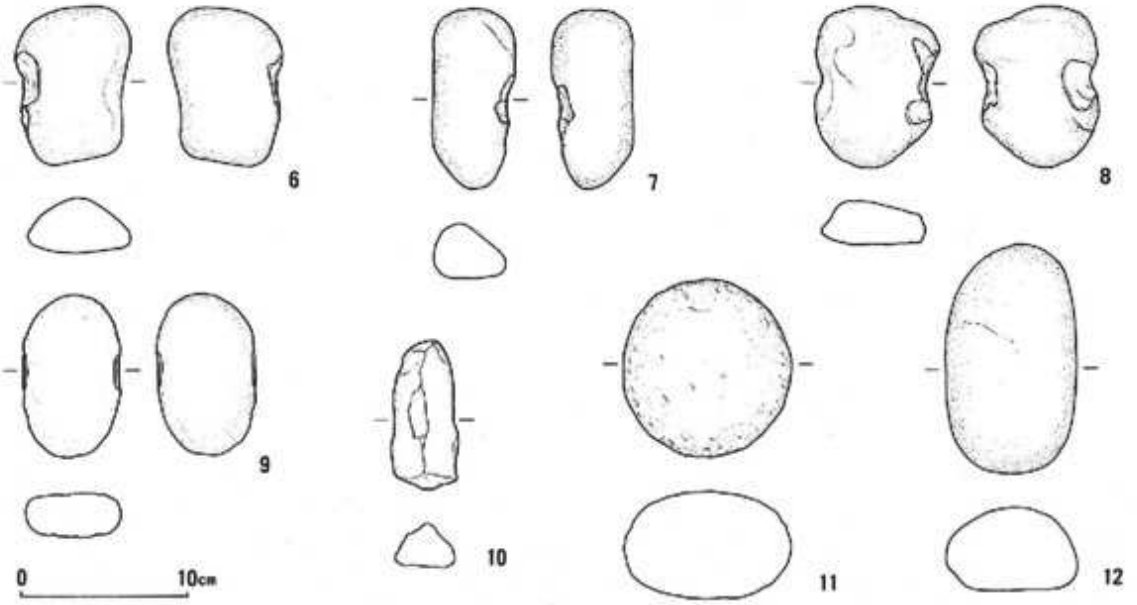
第87図　H20号住居址遺物分布図



第88図　H20号住居址出土土器（1：4）

表33　H20号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	土師器	坏	(14.0) — 5.0	口縁～底部1/2	非ロクロ	内面：炭毛目→ヘラミガキ 外面：口縁＝コナデ・体部～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面：5YR6/6 外面：5YR6/6 断面：5YR6/6	Ⅰ区4層	
2	土師器	坏	(14.9) (10.0) 4.6	口縁～底部1/3	非ロクロ	内面：みこみ部ナデ→口縁＝コナデ→ヘラミガキ 外面：口縁＝コナデ→底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面：5YR6/6 外面：5YR6/6 断面：5YR6/6	Ⅳ区4層	
3	土師器	坏	(16.9) (11.0) 4.8	口縁～底部2/3	非ロクロ	内面：みこみ部ナデ→口縁＝コナデ→ヘラミガキ・黒色処理 外面：口縁＝コナデ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面:7.5YR7/6 断面：10YR8/3	P1	外面底部にヘラ記号『十』あり
4	土師器	坏	(16.4) (7.6) 4.1	口縁1/4 底部3/4	非ロクロ	内面：口縁＝コナデ・みこみ部ナデ→ヘラミガキ→黒色処理 外面：口縁＝コナデ・底部ヘラケズリ→口縁ヘラミガキ	外面:7.5YR6/4 断面:7.5YR6/4	Ⅱ・Ⅲ区3層	
5	土師器	甕	6.3 〈3.7〉	底部完形	非ロクロ	内面：炭毛目→ナデ 外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面:7.5YR6/4 外面：10YR6/3 断面:7.5YR6/4	Ⅰ区4層	



第89図　H20号住居址出土石器（1：4）

表34　H20号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
6	錘形石	石英安山岩	9.5	6.8	3.5	300	Ⅲ区4層	一側縁にノッチ状加工
7	錘形石	石英安山岩	10.6	4.8	3.3	240	Ⅲ区4層	一側縁にノッチ状加工
8	錘形石	輝石安山岩	10.1	7.3	2.7	250	Ⅲ区4層	両側縁にノッチ状加工
9	錘形石	石英安山岩	9.7	5.4	2.7	240	Ⅲ区4層	両側縁にノッチ状加工
10	錘形石	チャート	8.9	4.0	3.3	130	Ⅲ区床面	
11	敲石	花崗岩	10.6	9.4	6.4	1000	Ⅲ区2層	周縁部に敲打痕
12	敲石	安山岩	13.7	7.8	5.1	910	Ⅲ区3層	両端部に敲打痕

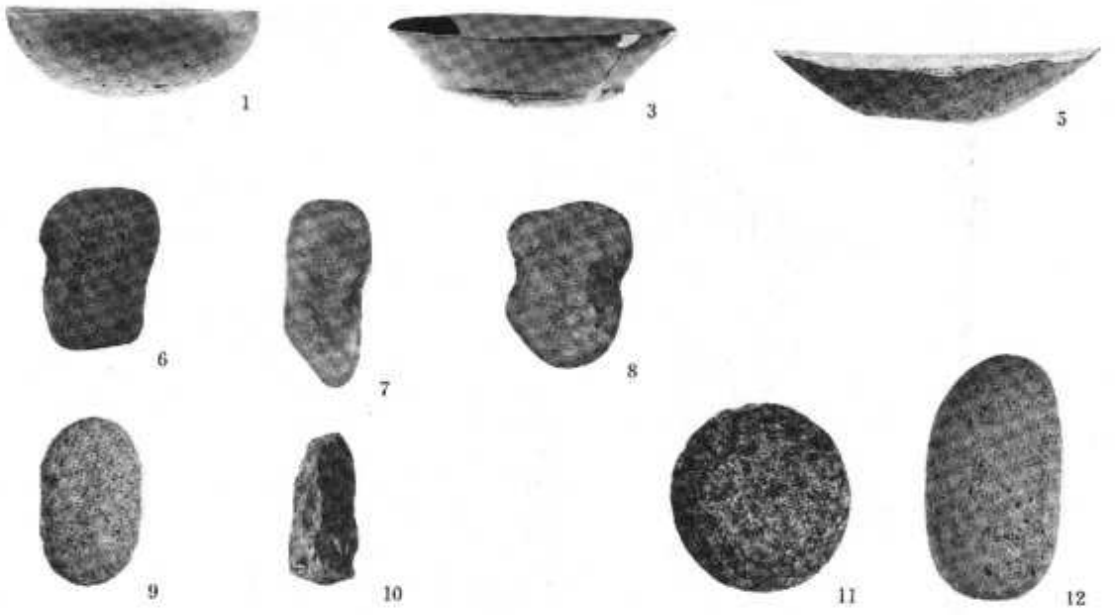
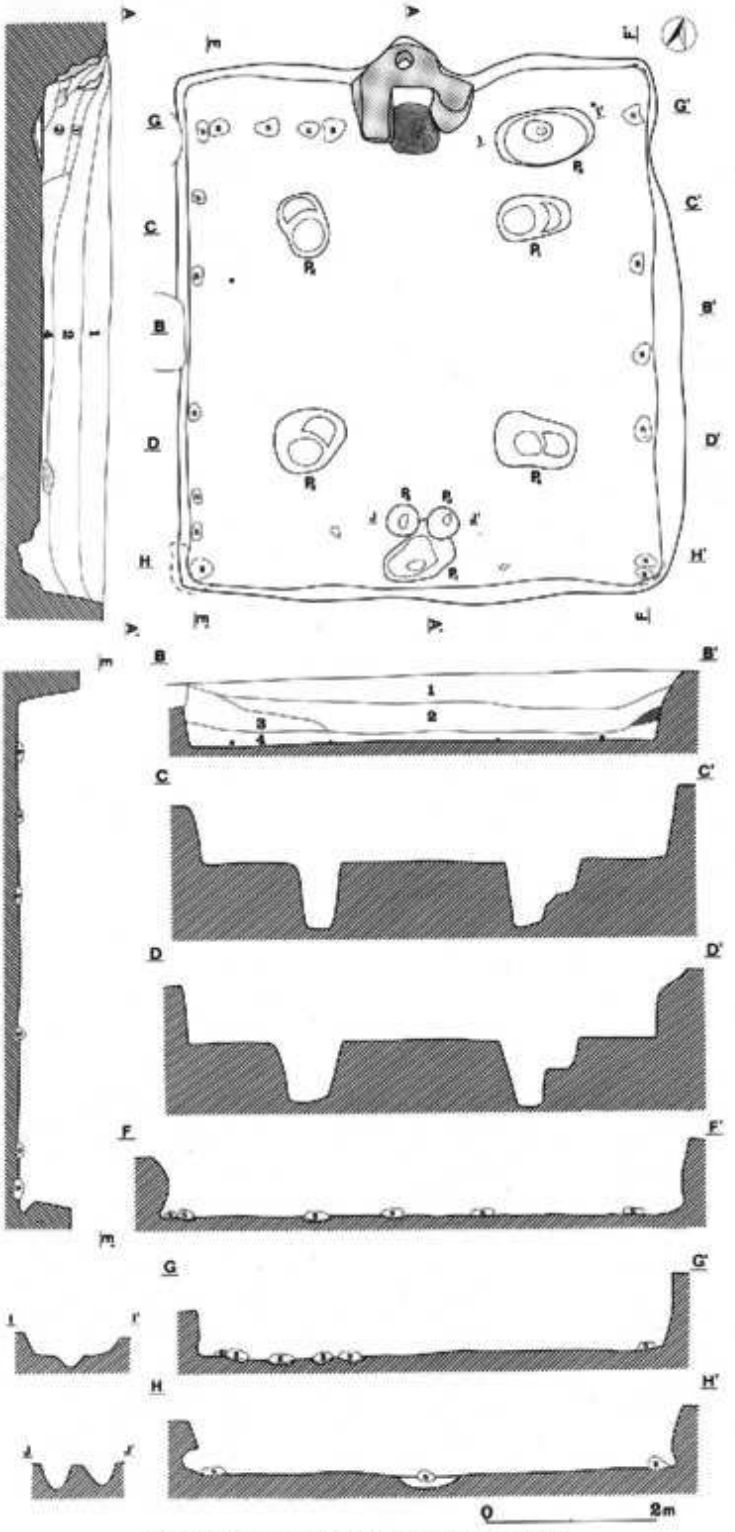


写真81　H20号住居址出土遺物



第90図　H21号住居址実測図（1：80）

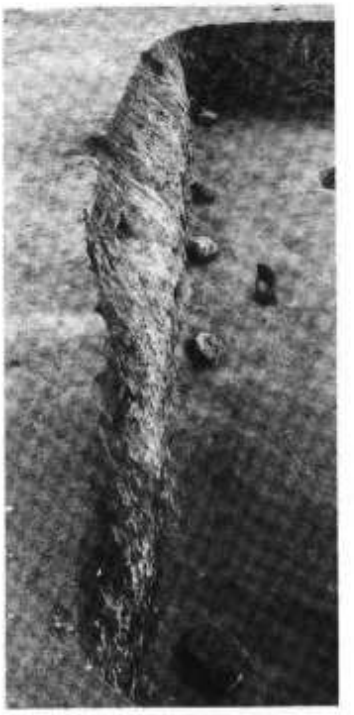


写真82　東壁石列（北から）

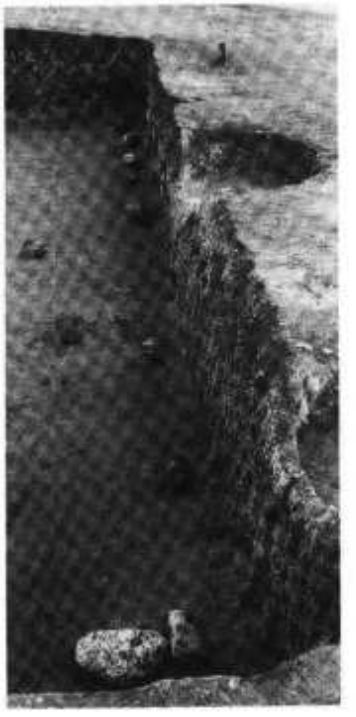
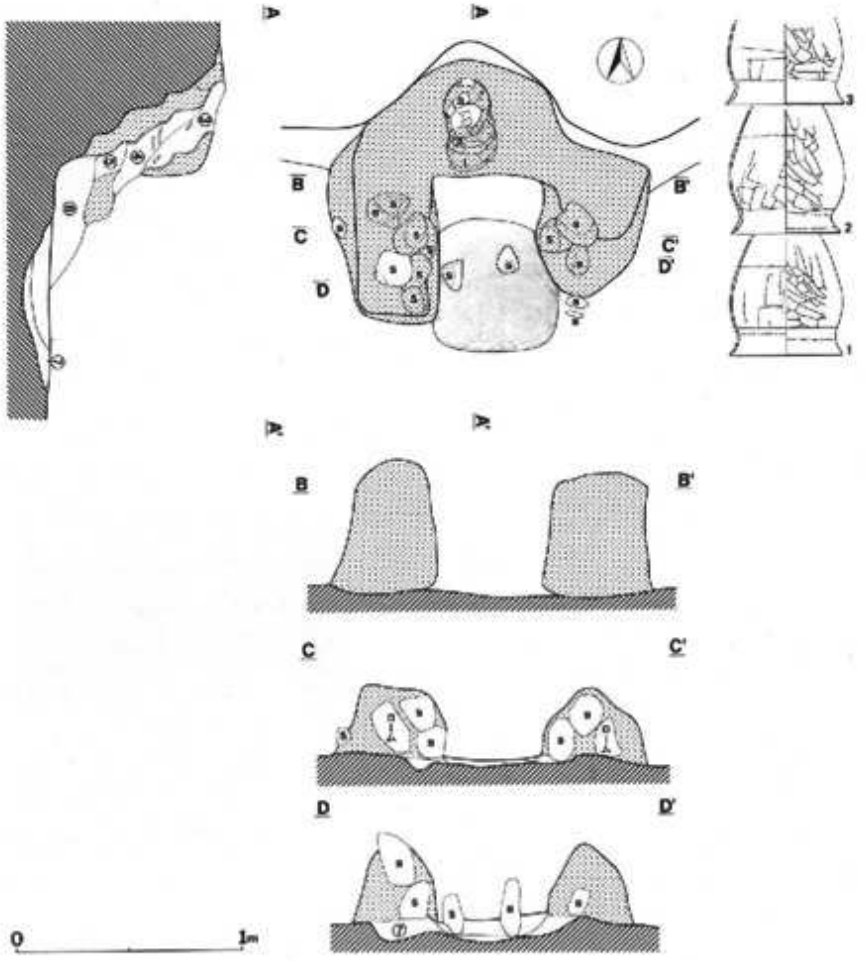


写真83　西壁石列（北から）



第91図　H21号住居址カマド実測図（1：30）

写真84
カマド煙道の土器

写真85　H21号住居址カマド

H21号住居址は、第1区Lき・く2・3グリッドより検出された。F8号掘立柱建物址によって西壁上部の一部が破壊されている。

本住居址は、南北6.4m、東西5.9mの隅丸方形を呈し、31.3㎡の床面積を有する大形の住居址である。主軸方向はN－16°－Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、東壁では上部に外反箇所が存在する。また、北東隅、南東隅、南西隅では床面でオーバーハングしている。確認面からの壁高は68～84cmである。

周溝は認められないが、東西壁の直下と北壁西半から50cm程内に入ったラインの床面に石列が配されていた。東壁は6個の配石で、北壁西半の配石と同一ラインに1個、中央部に等間隔に3個、南壁に接して2個が並んでいた。西壁では北壁西半の配石と同一ラインから南壁までに、中央部にやや間隔を設けて7個がほぼ等間隔に並んでいた。北壁西半は4個が小間隔で並ぶ。用いられた石は長さ20～30cm、厚さ10cm程度の軽石である。

主柱穴は規則な配置にある4個（P1～P4）である。掘り方は、大形楕円形を呈し、片側にテラスを有する2段の掘り込みであった。P1は51×86cm、深さ84cm、P2は75×50cm、深さ77cm、P3は74×88cm、深さ70cm、P4は58×98cm、深さ76cmを測る。南壁中央際では、36×38cm、深さ31cmのP5と37×37cm、深さ26cmのP6が並んで検出され、その下に55×88cm、深さ26cmの不正形な掘り込みであるP7がみられた。出入口部施設に関連するものであろう。また、P7上面には軽石が配されていた。P8は、カマド右脇に存在し、66×117cm、深さ42cmの楕円形を呈する大形のピットである。貯蔵穴と考えられようか。

住居覆土は4層からなり、1層はパミスを多量に含む黒褐色土、2層は暗褐色土、3層は西壁側に見られたパミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土、4層は床面を埋める黒褐色土である。

カマド

カマドは北壁中央に構築され、比較的良好な遺存状態を示していた。

煙道部の構築方法は、①半円形の緩やかな掘り込みを設ける。②その掘り込みの中央部をさらに階段状に掘り込む。③その掘り方に橙色粘土を貼り、底部を抜いた土師器長胴甕3個を連結して設置する。④さらに橙色粘土を貼って設置した土器を固定する。という在り方をなしていた。

袖部は、面取りした軽石を組み上げて芯とし、ロームと橙色粘土を構材として構築されていた。

火床面では、80×120cm、深さ20cm程度の楕円

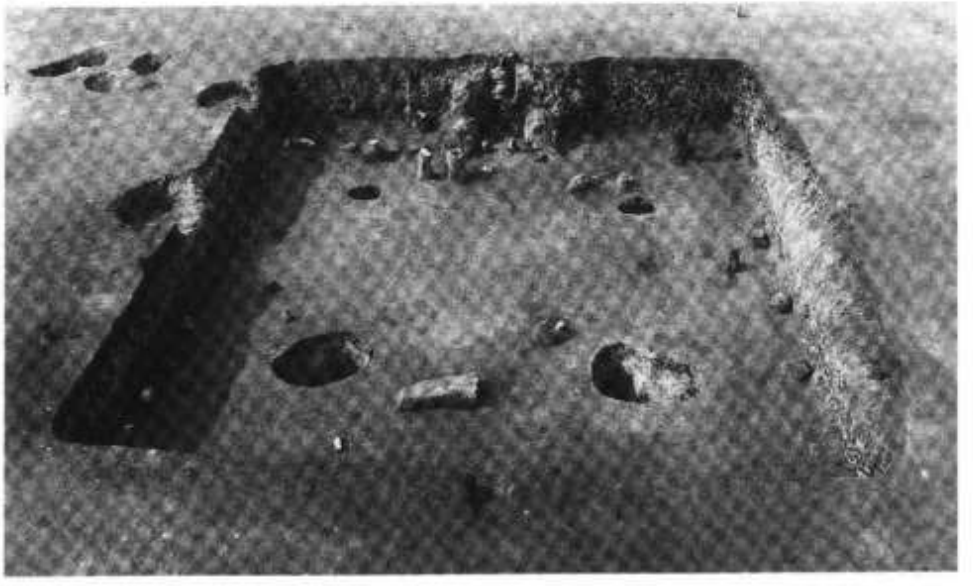
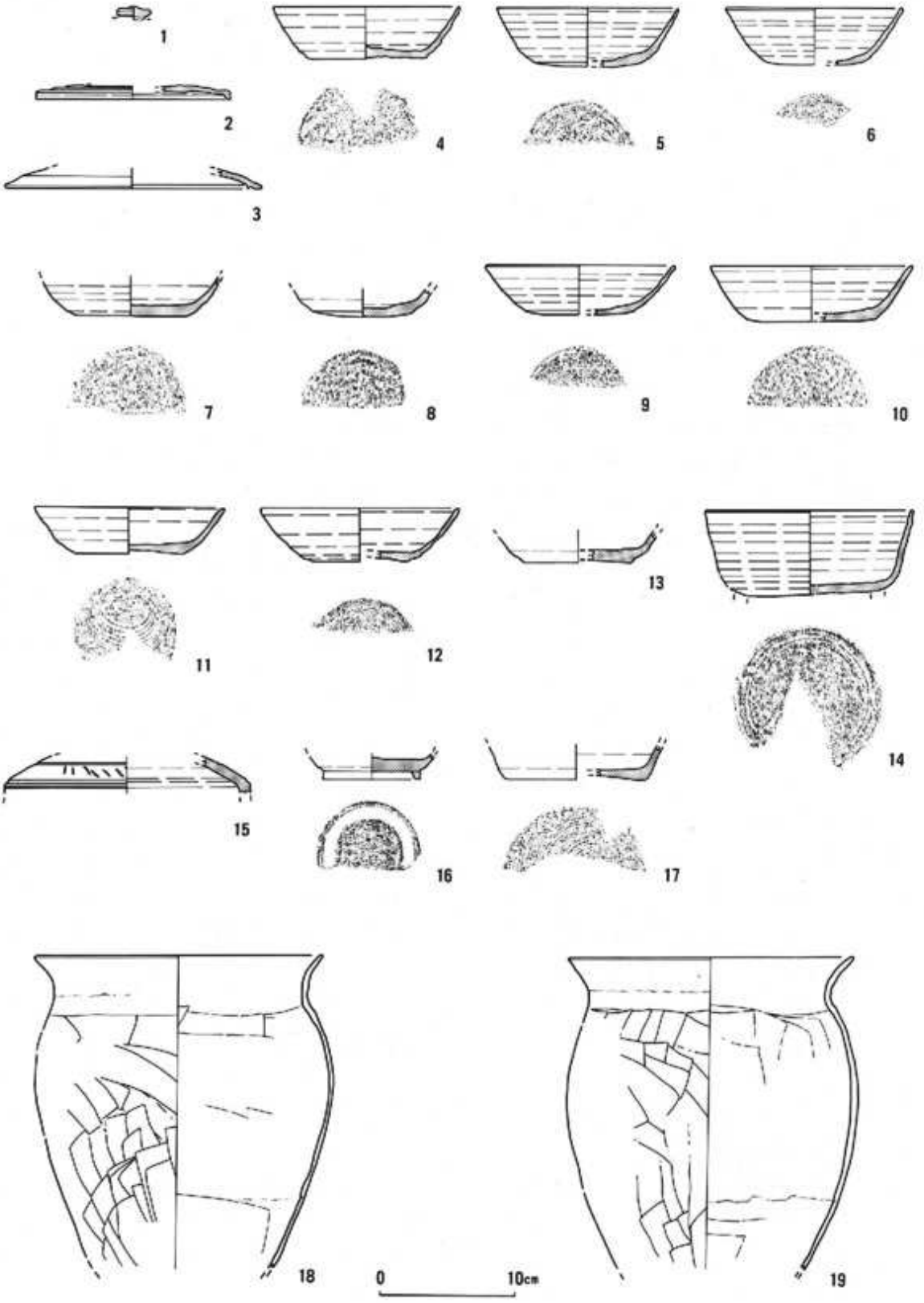
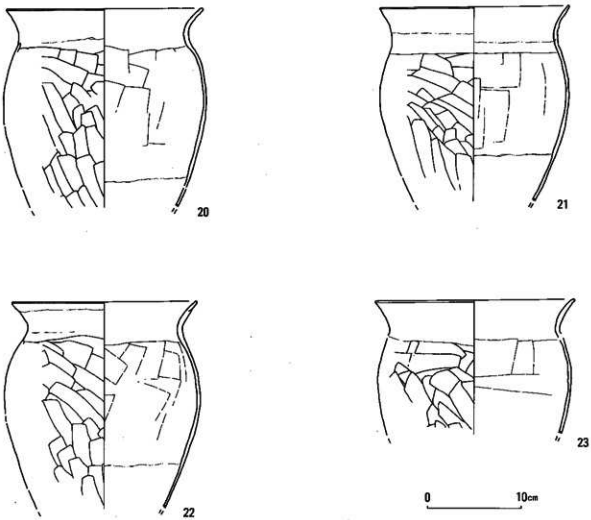


写真86　H21号住居址



第92図　H21号住居址出土土器Ⅰ（1：4）



第93図　H21号住居址出土土器Ⅱ（1：4）

形の掘り込みを設けた後に、褐色土（⑦層）で埋め戻し、軽石を柱状に加工した支脚石2個が埋め込まれていた。

覆土は、橙色粘土ブロックを多量に含む褐色土（①層）と黒褐色土（②層）、煙道部を埋める黒褐色土（③層）・黄褐色土（④層）・黒褐色土（⑤層）、奥壁部を埋めるにぶい褐色土（⑥層）であった。

遺物

1・2層で遺物が多量に出土したが、床面近くでの遺物出土量は極めて少なかった。主要遺物には、須恵器蓋・坏・壺、土師器甕、敲石、刀子、鉄鏃、鎹があった。

1～3は須恵器蓋である。宝珠形のつまみ部である1はⅡ区1層から、2は西壁際の床面から、かえりを有する3はⅢ区3層から出土している。

4～13は須恵器坏である。回転ヘラ切りによるもの（4・5）、手持ちヘラケズリが施されているもの（6・7）、回転ヘラケズリが施されているもの（8）、回転糸切りの後に手持ちヘラケズリが施されているもの（9）、回転糸切りの後に周縁に手持ちヘラケズリが施されているもの（10）、回転糸切りの後に周縁に回転ヘラケズリが施されているもの（11）、回転糸切りで調整がなされていないもの（12・13）がみられた。4がカマド②層と4層、5が4層の出土で、6～13は1・2層から出土したものである。

14は器高が高い須恵器高台付坏で、P8内とⅠ区4層に破片が分布していたものである。

18～23は口縁部が「コ」の字状に、胴上半部が

表35　H21号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	— 2.6 (1.0)	つまみ完形	ロクロ		内面：N5/0 外面：N5/0 断面：N5/0	Ⅱ区1層	
2	須恵器	蓋	(14.4) — (1.1)	口縁1/4	ロクロ	外面：天井部手持ちヘラケズリ	内面：2.5Y5/1 外面：2.5Y5/1 断面：2.5Y6/4	Ⅲ区床面	
3	須恵器	蓋	(19.0) — (1.5)	口縁1/12	ロクロ	外面：天井部回転ヘラケズリ	内面：N7/0 外面：N7/0 断面：N7/0	Ⅲ区3層	
4	須恵器	坏	(13.8) (9.0) 3.8	口縁～底部1/2	ロクロ	→底部回転ヘラ切り	内面：N6/0 外面：N6/0 断面：N6/0	カマド②層 Ⅱ区4層	火襷あり
5	須恵器	坏	(13.5) (8.0) 4.3	口縁一部底部1/3	ロクロ	・底部回転ヘラ切り 外面：底部ナデ	内面：5Y6/1 外面：5Y6/1 断面：2.5Y6/2	Ⅰ区4層	
6	須恵器	坏	(13.0) (7.2) 4.1	口縁～底部1/3	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面：N6/0 外面：N6/0 断面：N6/0	Ⅱ区2層	火襷あり
7	須恵器	坏	— (8.0) (2.9)	底部1/2	ロクロ	→底部回転ヘラ切り 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面：7.5Y6/1 外面：7.5Y6/1 断面：7.5Y6/1	Ⅱ区2層	火襷あり
8	須恵器	坏	— — (2.1)	底部1/2	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：2.5Y6/1 外面：2.5Y6/1 断面：2.5Y8/1	Ⅲ区2層	
9	須恵器	坏	(14.0) (8.2) 3.6	口縁～底部1/3	ロクロ	→底部回転糸切り 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面：N6/0 外面：N6/0 断面：N6/0	Ⅳ区1層	火襷あり
10	須恵器	坏	(14.8) (9.4) 4.1	口縁～底部1/4	ロクロ	・底部回転糸切り 外面：底部周縁手持ちヘラケズリ	内面:7.5Y R6/2 外面:7.5Y R6/2 断面:7.5Y R6/2	Ⅱ区2層	火襷あり
11	須恵器	坏	(14.0) (8.0) 3.4	口縁1/4底部3/4	ロクロ	→底部回転糸切り 外面：底部周縁回転ヘラケズリ	内面：5Y R4/1 外面:7.5Y R6/2 断面:7.5Y R6/2	Ⅰ区1・2層	
12	須恵器	坏	(14.6) (7.0) 3.9	口縁1/4底部1/3	ロクロ	→底部回転糸切り	内面：2.5Y6/2 外面：2.5Y6/2 断面：5Y6/1	Ⅳ区2層	火襷あり
13	須恵器	坏	— (8.0) (2.4)	底部1/3	ロクロ	→底部回転糸切り	内面：5Y6/1 外面：5Y6/1 断面：5Y6/1	Ⅲ区2層	火襷あり
14	須恵器	坏	15.3 11.0 6.3	口縁～底部3/4	ロクロ	・底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付（高台欠損） 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：5R4/1 外面：5R4/1 断面：5YR4/1	Ⅰ区4層 P8	
15	須恵器	壺	— (2.8)	肩部1/5	ロクロ	外面：肩部に沈線および列点文（工具痕）を施す	内面:7.5Y R5/2 外面:7.5Y R5/1 断面:7.5Y R5/2	Ⅱ区3層	
16	須恵器	壺	— (7.2) (2.0)	底部1/2	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：7.5Y5/1 外面：7.5Y5/1 断面：7.5Y5/1	Ⅳ区2層	火襷あり
17	須恵器	壺	— (10.2) (2.6)	底部1/2	ロクロ	→底部回転糸切り	内面：5PB7/1 外面：5PB7/1 断面：5PB7/1	Ⅳ区2層 Ⅲ区1層	
18	土師器	甕	20.1 — (23.0)	口縁完形	非ロクロ	内面：口縁＝コナデ→胴部ヘラナデ 外面：胴部ヘラケズリ→口縁＝コナデ	内面：5YR4/1 外面:2.5YR5/4 断面:2.5YR5/4	カマド②層	
19	土師器	甕	20.7 — (23.0)	口縁3/4	非ロクロ	内面：口縁＝コナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁＝コナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR4/1 外面：5YR5/3 断面：5YR5/3	カマド②層	
20	土師器	甕	20.6 — (21.0)	口縁3/4	非ロクロ	内面：口縁＝コナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁＝コナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR3/2 外面：5YR5/4 断面：5YR5/4	カマド②層	
21	土師器	甕	19.8 — (20.7)	口縁～胴部完形	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ ・口縁＝コナデ 外面：胴部ヘラケズリ→口縁＝コナデ	内面：5YR5/4 外面：5YR6/6 断面：5YR6/6	カマド煙道	
22	土師器	甕	19.4 — (22.0)	口縁～胴部完形	非ロクロ	内面：口縁＝コナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁＝コナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR5/4 外面:2.5YR5/4 断面:2.5YR5/4	カマド煙道	
23	土師器	甕	(20.8) — (14.3)	口縁7/8	非ロクロ	内面：口縁＝コナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁＝コナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR4/3 外面：5YR5/4 断面：5YR5/4	カマド煙道	

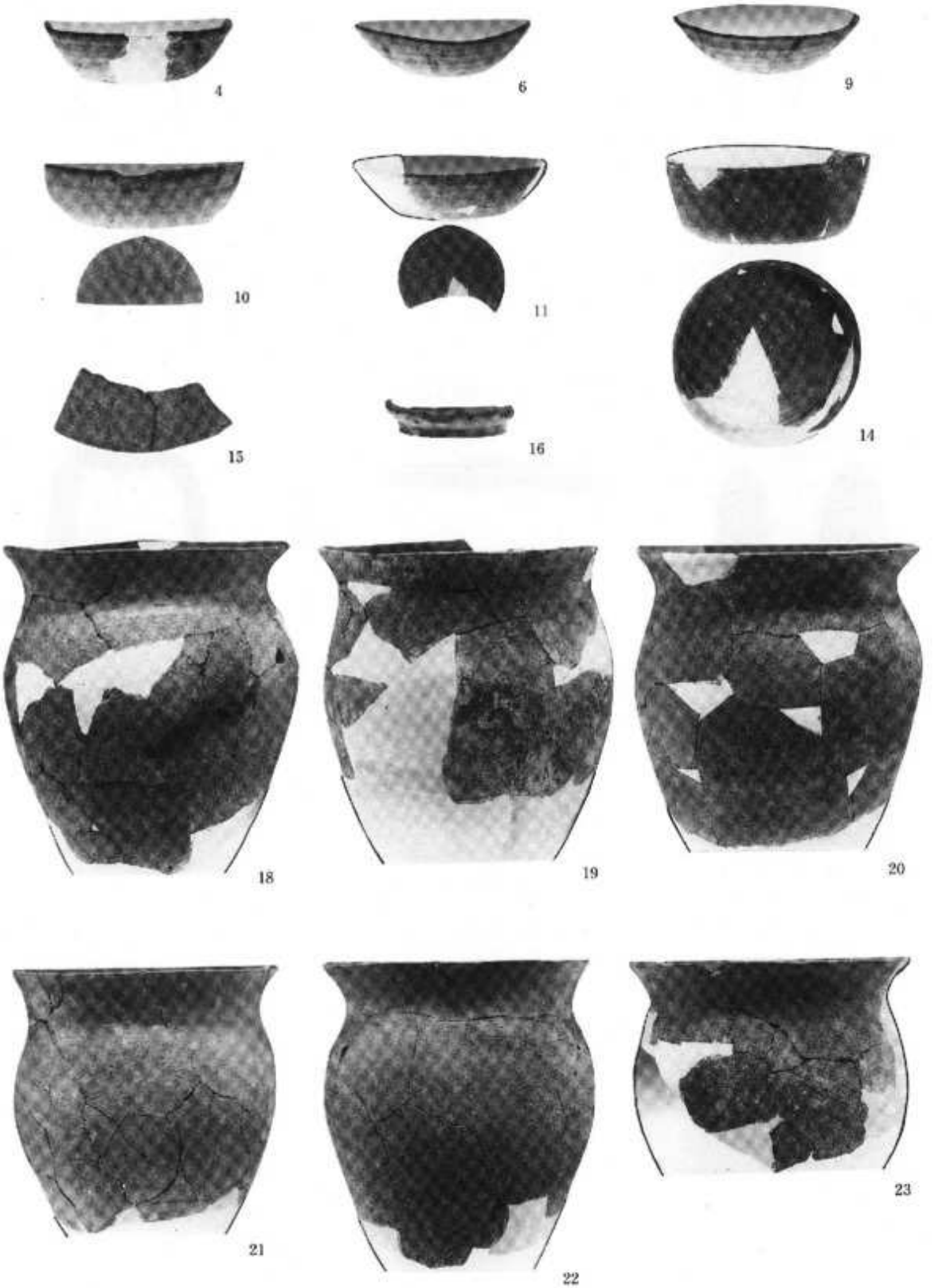
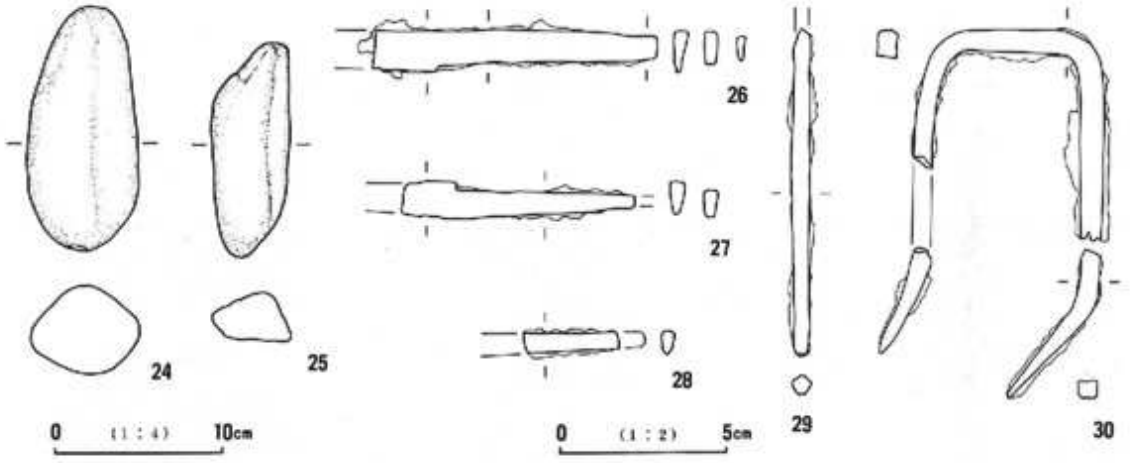


写真87　H21号住居址出土土器



第94図　H21号住居址出土石器・鉄器

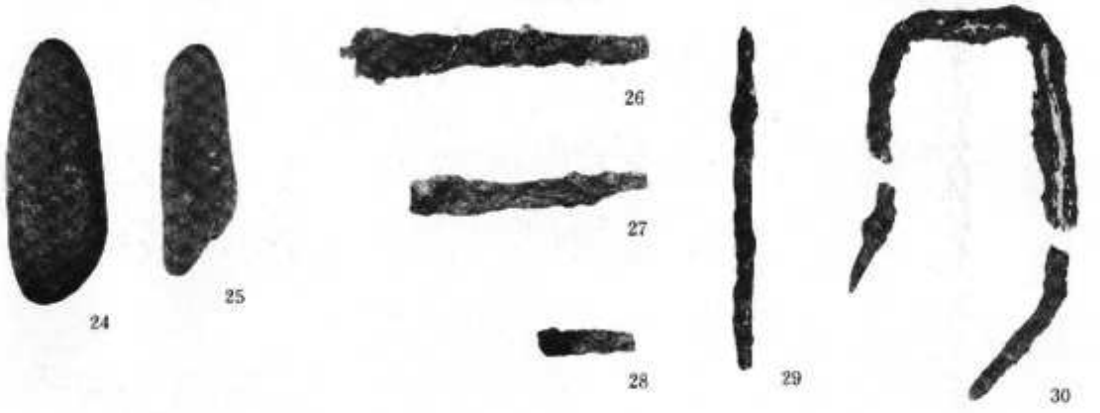


写真88　H21号住居址出土石器・鉄器

表36　H21号住居址出土石器・鉄器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備　考
24	敲　石	安山岩	14.5	6.5	5.3	660	Ⅲ区床面	両端部に敲打痕
25	敲　石	石　英 安山岩	12.8	4.6	3.5	280	Ⅳ区床面	両端部に敲打痕
26	刀　子	鉄	(8.4)	1.2	0.4	(11.8)	Ⅰ区1層	
27	刀　子	鉄	(6.9)	1.1	0.4	(7.3)	Ⅰ区1層	
28	刀　子	鉄	(2.9)	0.8	0.4	(1.9)	Ⅰ区1層	
29	鉄　鏃	鉄	(9.8)	0.5	0.5	(6.9)	Ⅲ区2層	
30	鎹	鉄	11.9	0.7	0.5	27.2	Ⅲ区床面	

張る傾向を示す土師器長胴甕である。18～20はカマド内あるいはカマド周辺の②層に破片が分布していたものであり、21～23は煙道部に用いられたものである。

24・25は両端部に敲打痕がみられる敲石で、P7両脇の床面から検出されている。

26～28の刀子はⅠ区1層、29の鉄鏃基部はⅢ区2層、30の鎹は西壁脇床面からの検出である。

以上の土器群で、回転糸切り手法の須恵器坏・須恵器高台付坏・土師器長胴甕における特徴は、八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初等の土器様相と把握できよう。

(22) H22号住居址　　奈良時代

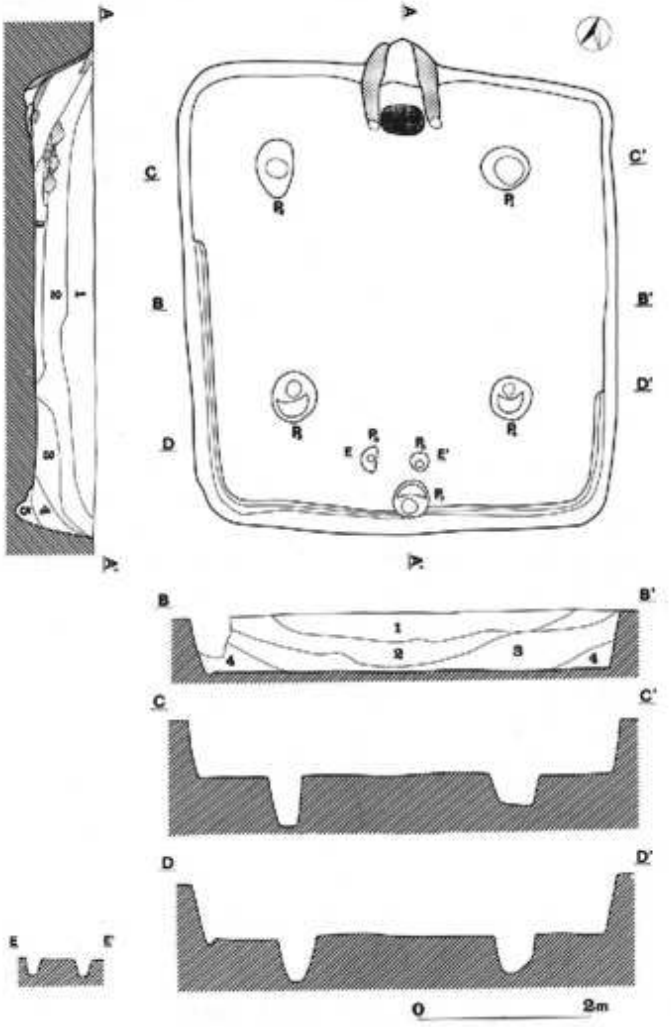
H22号住居址は、第1区Lお・か1・2グリッドより検出された。ピットによって西壁上部が一部破壊されている。

平面形態は、南北5.5m、東西5.1mの隅丸方形を呈し、24㎡の床面積を有する。主軸方向はN－19°－Wを指す。

壁は95度の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は66～72cmである。幅7～17cm、深さ2～8cmの周溝が、南壁側を半周する。

主柱穴は規則に配置された4個（P1～P4）である。P1は51×52cm、深さ38cm、P2は68×44cm、深さ60cm、P3は60×54cm、深さ54cm、P4は51×47cm、深さ46cmを測る。南壁中央際では、30×18cm、深さ21cmのP5と23×21cm、深さ22cmのP6が並んで検出され、南壁に接して43×40cm、深さ20cmのP7が検出された。

住居覆土は4層からなり、1層がパミス・ローム粒子を多量に含む褐色土、2層がパミス・ローム粒子を含む褐色土、3層が暗褐色土、4層が壁際床面を埋める黒褐色土である。



第95図
H22号住居址実測図（1：80）

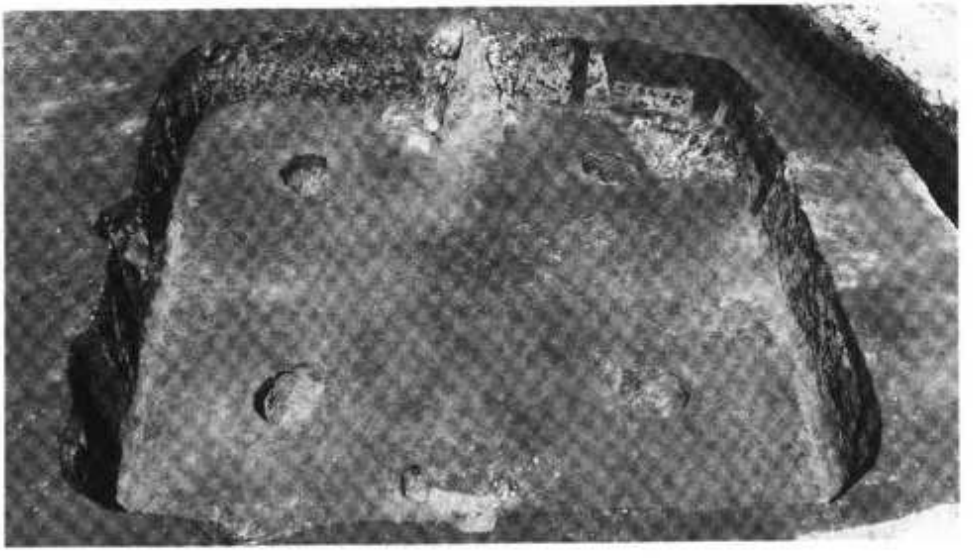


写真89
H22号住居址

カマド

カマドは北壁中央に位置していた。

煙道部は半円形の緩やかな掘り込みの後、中央部を柱状に掘り込み灰白色粘土が貼られていた。灰白色粘土で構築された両袖部の一部が確認され、両袖部先端には面取りされた軽石が埋め込まれていた。火床面は、楕円形の掘り方と袖石埋め込み用のピットがみられ、にぶい黄褐色土（②層）で埋め戻されていた。

覆土は、灰白色粘土ブロック・炭化物片を含む暗褐色土（①層）である。なお、カマド前方の①層と3層上面に軽石を含む灰白色粘土ブロックの集中がみられた。また、軽石の集中部は住居中央の床面にも存在していた。

遺物

検出された主要遺物は、須恵器坏・甕、土師器甕、砥石、鉄鏃である。

1の須恵器坏は、盤状を呈し、回転糸切りの後に回転ヘラケズリで調整された底部をみせる。2の須恵器坏は、底部に手持ちヘラケズリが施されたものである。共にⅠ区1層中から検出されている。

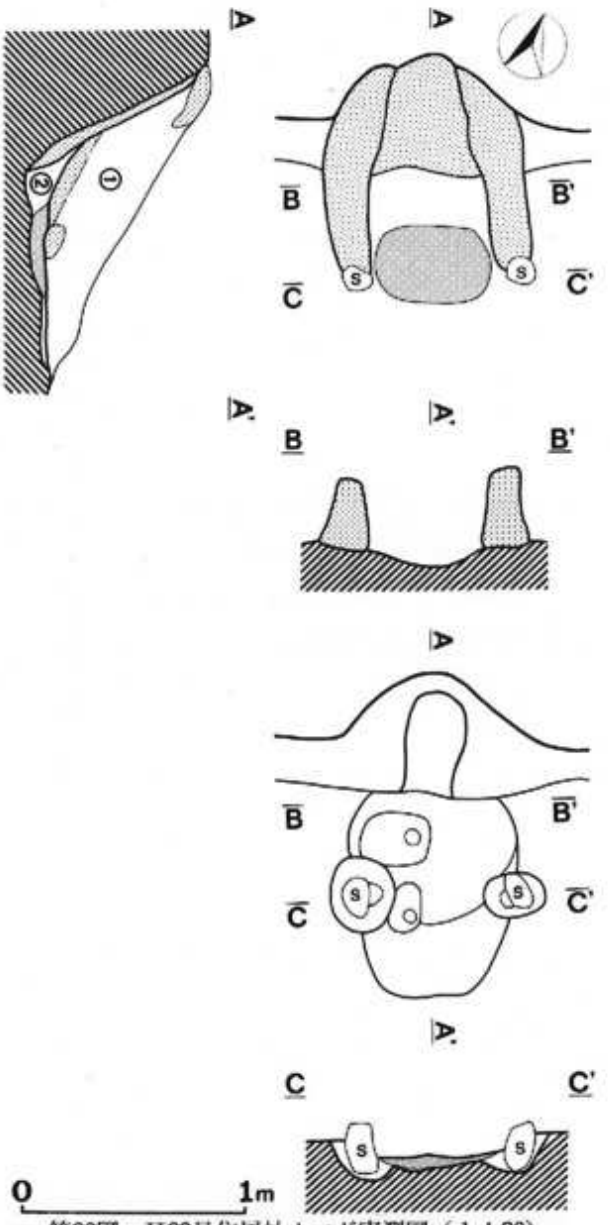
3は口径の大きい須恵器高台付坏で、Ⅱ区3層から出土したものである。

4・5は土師器小形甕で、4の底部はⅡ区3層から、5の口縁部はⅡ区の2層と3層から出土している。

7・8は土師器長胴甕である。7の底部は、カマド①層に分布していたものであり、8の「コ」の字状口縁の傾向を示す長胴甕は、9の広口の須恵器甕と共に北東隅の床面から検出されている。

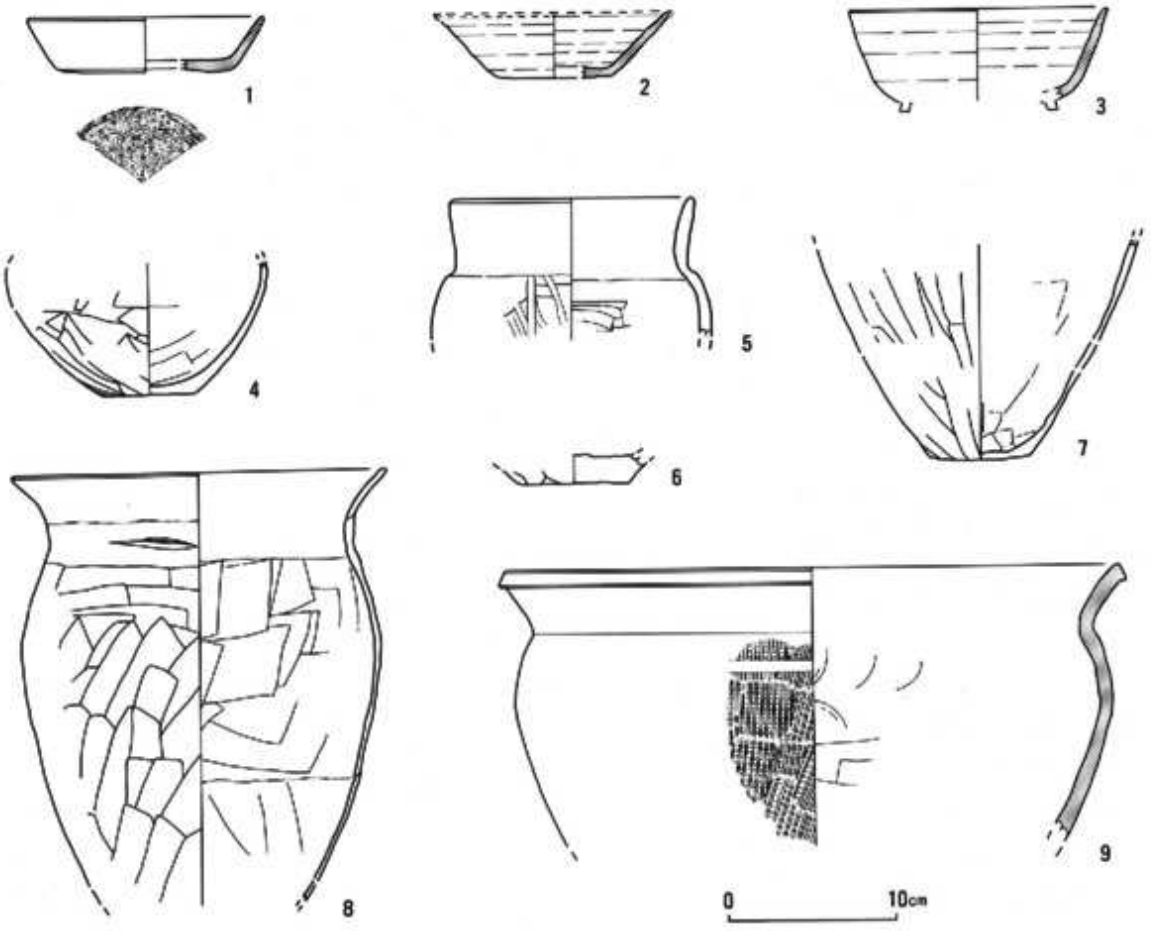
10は砂岩製の砥石で、南壁中央際床面から検出された。11は鉄鏃の基部と思われるもので、住居中央西側床面の出土である。

須恵器高台付坏・土師器長胴甕は、その特徴から八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初等の土器と考えられよう。



第96図　H22号住居址カマド実測図（1：30）

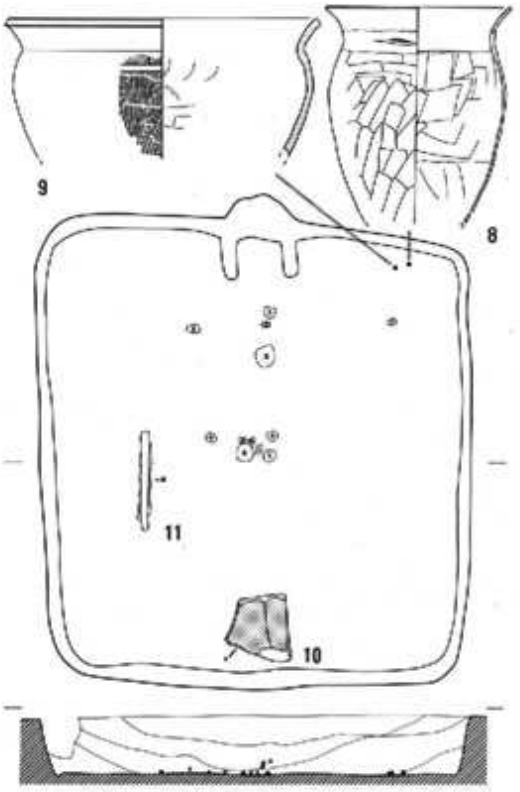
写真90　H22号住居址カマド



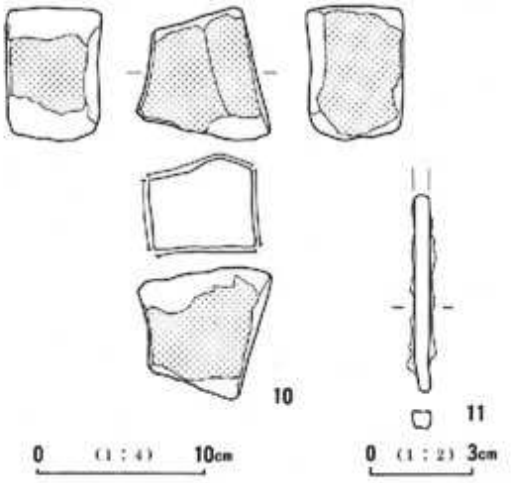
第97図　H22号住居址出土土器（1：4）

表37　H22号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(13.9) (10.4) 3.3	口縁1/10 底部1/4	ロクロ	→底部回転糸切り 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：7.5Y5/1 外面：7.5Y5/1 断面：7.5Y6/1	Ⅰ区1層	
2	須恵器	坏	— (8.6) 3.9	底部1/5	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面:7.5YR6/4 外面:7.5YR6/4 断面:7.5YR7/4	Ⅰ区1層	
3	須恵器	坏	(15.2) — (5.4)	口縁1/5	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付（高台欠損）	内面:2.5GY5/1 外面:2.5GY6/1 断面:2.5GY6/1	Ⅱ区3層	
4	土師器	甕	— 5.5 (7.9)	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ	内面：5YR5/6 外面：5YR5/6 断面：5YR5/4	Ⅱ区3層	
5	土師器	甕	(14.4) — (8.3)	口縁一部 頸部1/5	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ →口縁ヨコナデ 外面：胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ→口縁ヨコナデ	内面：10YR7/4 外面:7.5YR6/6 断面：5YR5/1	Ⅱ区2・3層	
6	土師器	甕	— 6.6 (1.8)	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ	内面:7.5YR6/4 外面:2.5YR5/4 断面:2.5YR6/6	Ⅱ区1層	
7	土師器	甕	— 5.8 (12.7)	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ	内面：5YR5/4 外面：5YR6/4 断面：5YR3/8	カマド①層	
8	土師器	甕	21.9 — 25.6	口縁3/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ後部分的にナデ	内面:7.5YR5/6 外面：5YR6/4 断面:7.5YR7/3	Ⅰ区床面 Ⅰ区3層	
9	須恵器	甕	(36.9) — (16.4)	口縁1/3	ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ後当て具による押え 外面：叩き目（格子風印目文）→口縁ヨコナデ	内面：10Y6/1 外面：5YR6/2 断面:7.5YR7/4	Ⅰ区床面	



第98図　H22号住居址遺物分布図



第99図　H22号住居址出土石器・鉄器

表38　H22号住居址出土石器・鉄器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備　考
10	砥石	砂岩	7.9	7.9	5.6	200	Ⅱ区床面	
11	鉄器	鉄	(5.9)	0.5	0.6	(3.9)	Ⅱ区床面	

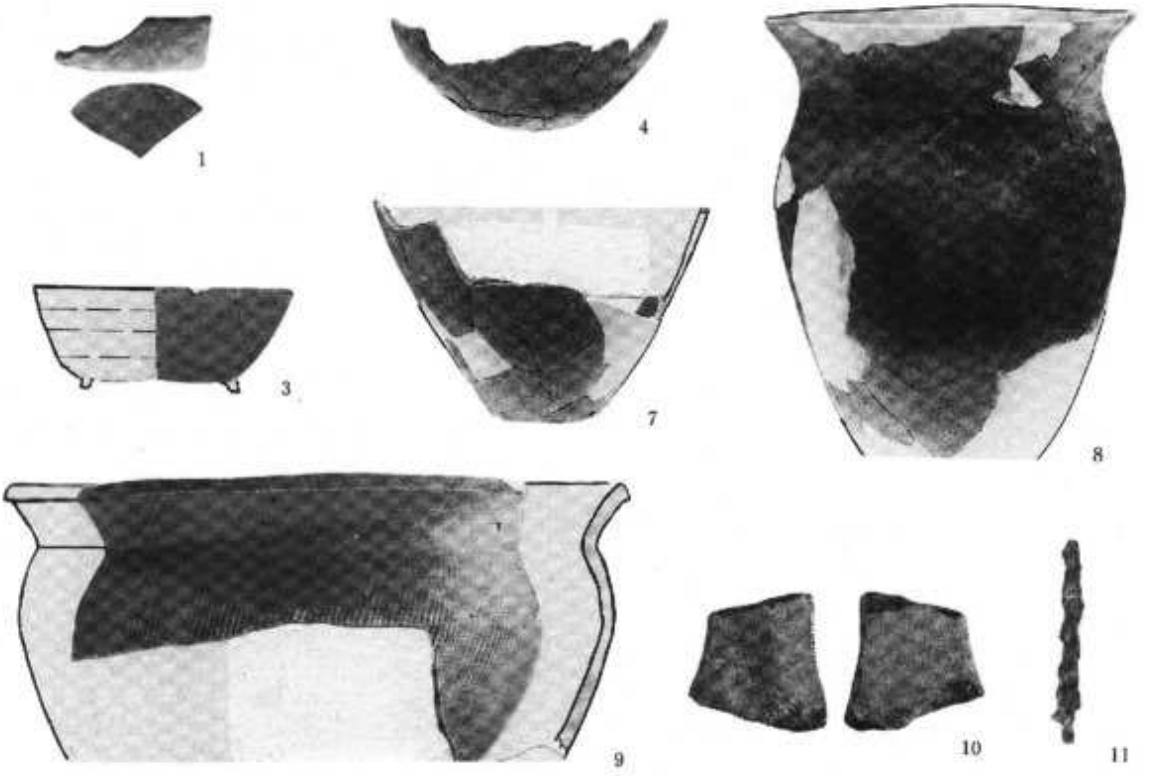


写真91　H22号住居址出土遺物

(23) H25号住居址　　奈良時代

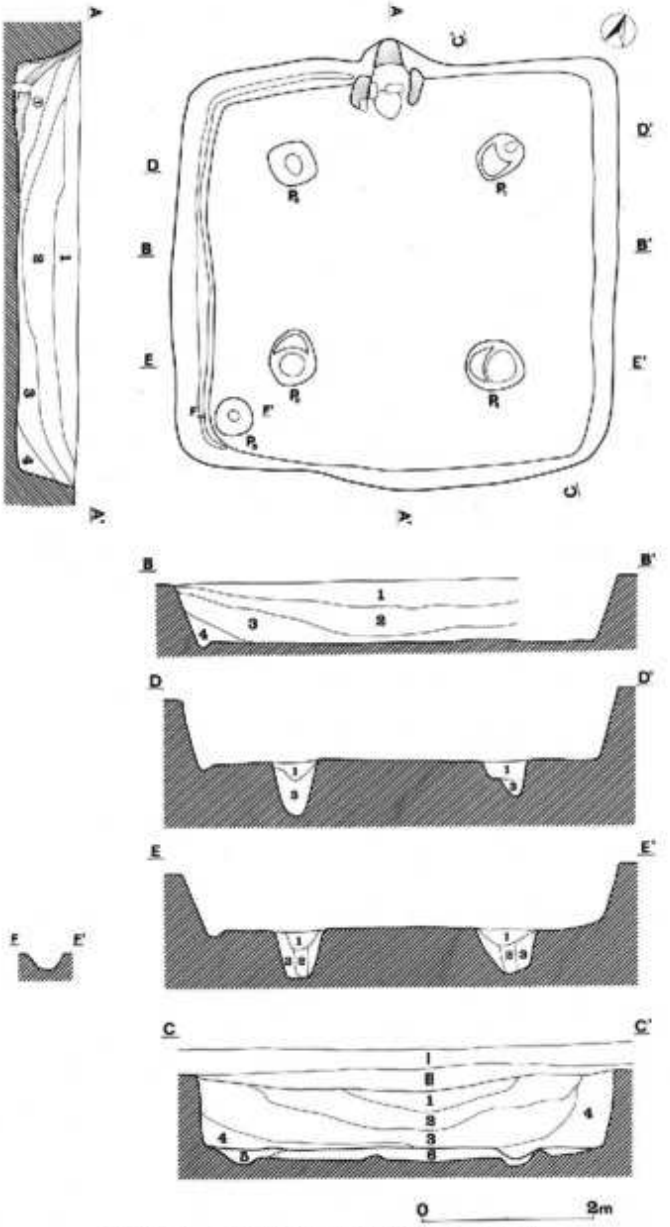
H25号住居址は、第1区Lえ・お2・3グリッドより検出された。Cセクション北側は聖原遺跡調査分である。

平面形態は、南北5.0m、東西5.2mの隅丸方形を呈する。床面積は20.7㎡を測る。主軸方向はN－23°－Wを指す。

壁は105度の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は最大で84cmを測る。幅10～20cm、深さ5～8cmの周溝が、北壁西半から西壁にかけて存在していた。

主柱穴は規則に配置された4個（P1～P4）が確認された。P1は60×44cm、深さ43cm、P2は52×58cm、深さ67cm、P3は67×55cm、深さ58cm、P4は58×68cm、深さ52cmを測る。なお、P3・P4では径18cm程の柱痕が確認された。また、南西隅で44×44cm、深さ21cmのP5が検出されている。

住居覆土は、4層からなる。1層は暗褐色土、2層はパミス・ローム粒子を多く含む暗褐色土、3層はパミス・ローム・ブロックを多量に含む暗褐色土、4層は壁際床面を埋める黒褐色土である。なお、Cセクションでは、本住居址がⅢ層中から掘り込まれていたこと、掘り方をロームと暗褐色土（5層は暗褐色土主体、6層はローム主体）で埋め、床面を形成していたことが確認された。



第100図　H25号住居址実測図（1：80）

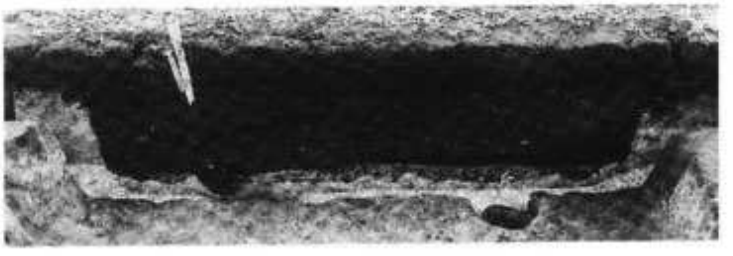


写真92　H25号住居址覆土

カマド

カマドは北壁中央に構築されている。

煙道部は、上部が半円形の掘り込みで、中央部が柱状の掘り込みである。柱状の掘り込み部には、橙色粘土が貼られていた。

橙色粘土で構築された両袖が僅かに確認された。また、両袖にピット状の掘り方がみられ、左袖部には面取りされた軽石が埋め込まれていた。

火床面は、皿状に掘り窪められ、軽石を柱状に加工した支脚石2個が据えられていた。

覆土は、上面を覆う橙色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土（①層）、煙道部から火床面にみられた崩落した粘土層、灰を含む黒褐色土（②層）、黒褐色土（③層）である。

遺物

出土した主要遺物は、須恵器蓋・坏、土師器坏・甕、敲石であるが、遺物の出土層位は覆土1層が主体であった。

1～3はつまみ部を欠く須恵器蓋で、1層中の遺物である。1・2はかえりを有するものである。なお、1にはH26号住居址の3層から出土した破片が接合している。

4・5は須恵器坏の体部破片、6・7は底部に回転ヘラケズリが施されている須恵器高台付坏で、出土層位は1層である。

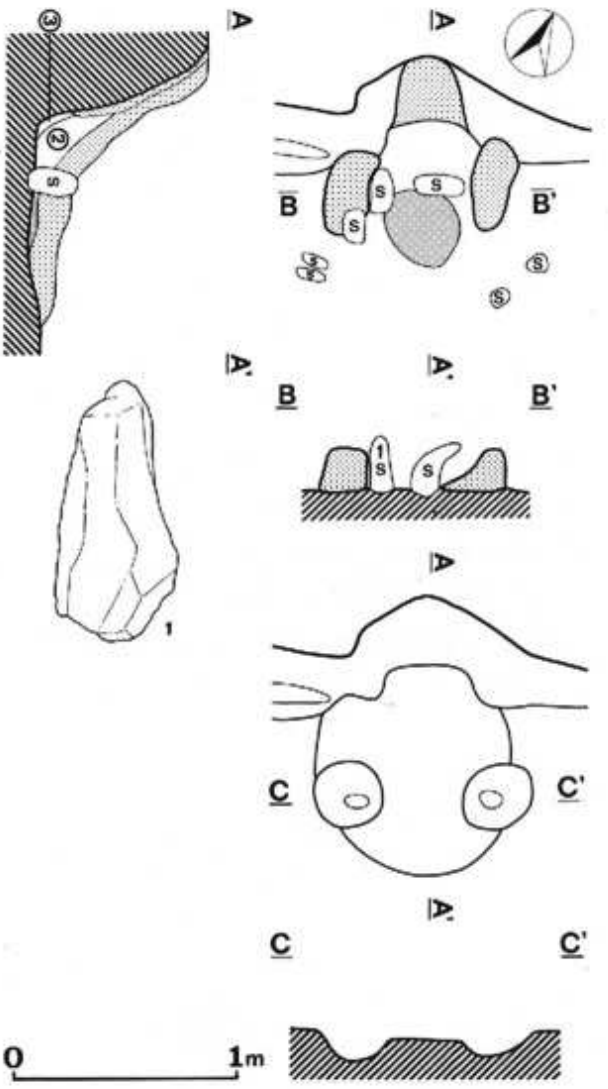
8は体部が弓なりに湾曲する土師器坏で、1層中の遺物である。

9は土師器小形甕で、カマド①層から出土している。

10は「く」の字状口縁の長胴甕で、Ⅲ区1層から出土している。

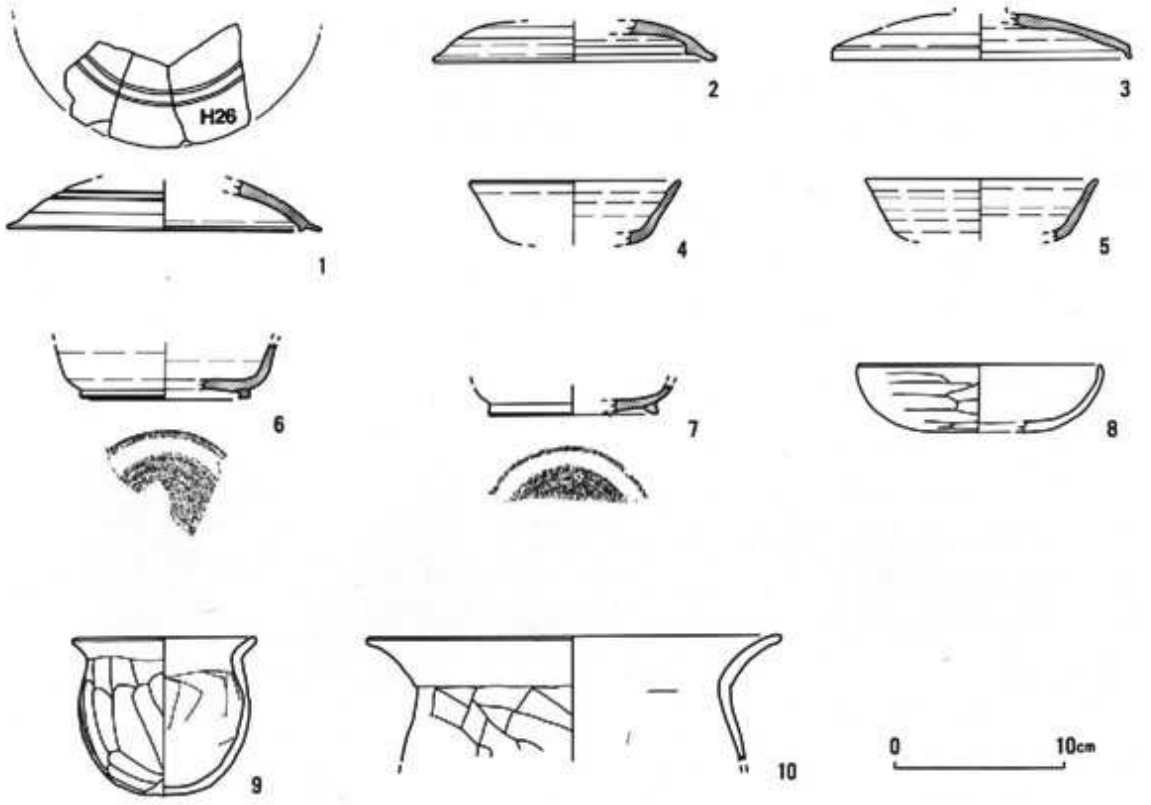
11・12は敲打によると考えられる剥離痕を有するもので、11は住居中央床面、12は西壁中央際床面から出土している。

かえりを有する須恵器蓋、「く」の字状口縁の長胴甕の特徴は、八世紀第Ⅰ四半期の土器様相として把握される。



第101図　H25号住居址カマド実測図（1：30）

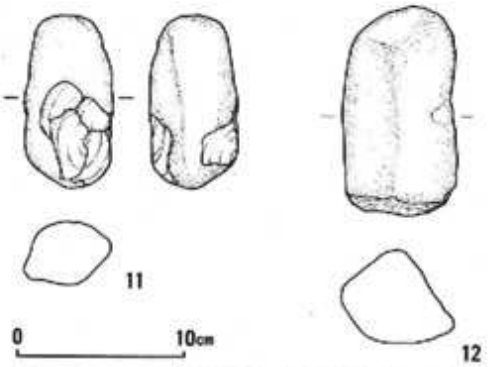
写真93　H25号住居址カマド



第102図　H25号住居址出土土器（1：4）

表39　H25号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	(18.4) — 〈3.0〉	口縁1/12	ロクロ	外面：天井部回転ヘラケズリ，二条の沈線を施す	内面：5Y7/1 外面：5Y7/1 断面：5Y7/1	Ⅱ・Ⅲ区1層 H26Ⅲ区3層	H26と接合
2	須恵器	蓋	(16.7) — 〈2.4〉	口縁1/14	ロクロ	外面：天井部回転ヘラケズリ	内面：10YR8/3 外面：7.5Y8/1 断面：7.5Y8/3	Ⅰ・Ⅱ区1層	
3	須恵器	蓋	(17.5) — 〈2.7〉	口縁2/5	ロクロ	外面：天井部回転ヘラケズリ	内面：7.5Y5/1 外面：N4/0 断面：7.5Y5/1	Ⅰ～Ⅳ区1層	
4	須恵器	坏	(12.4) — 〈3.9〉	口縁1/4	ロクロ		内面：10Y5/1 外面：7.5Y5/1 断面：10Y5/1	Ⅲ区1層	
5	須恵器	坏	(13.6) — 〈3.6〉	口縁1/3	ロクロ		内面：N7/0 外面：5Y7/1 断面：N7/0	Ⅲ区1層	
6	須恵器	坏	— 〈9.9〉 〈3.3〉	底部1/4	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：N5/0 外面：10Y4/1 断面：5RP4/1	Ⅱ・Ⅲ区1層	
7	須恵器	坏	— (10.0) 〈1.8〉	底部3/8	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：5Y5/1 外面：10GY4/1 断面：2.5Y6/1	Ⅲ区1層	
8	土師器	坏	(12.4) — 〈4.0〉	口縁1/5 底部1/3	非ロクロ	内面：ふこみ部ナデ→口縁ヨコナデ 外面：口縁ヨコナデ→体部～底部ヘラケズリ	内面：7.5YR7/6 外面：7.5YR6/6 断面：10YR7/4	Ⅰ・Ⅳ区1層	
9	土師器	甕	(10.8) 〈3.0〉 9.3	口縁～ 底部3/8	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部～底部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ・底部ナデ	内面：7.5YR7/6 外面：7.5YR4/2 断面：7.5YR5/4	カマド①層	
10	土師器	甕	(24.4) — 〈7.4〉	口縁1/4	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR5/4 外面：2.5YR7/6 断面：5YR7/4	Ⅱ区1層	



第103図　H25号住居址出土石器（1：4）

表40　H25号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
11	敲石	角閃石安山岩	10.3	5.3	4.5	290	Ⅳ区床面	両側縁に敲打痕
12	敲石	角閃石安山岩	12.4	6.7	5.8	580	Ⅲ区床面	端部に敲打痕

写真94　H25号住居址

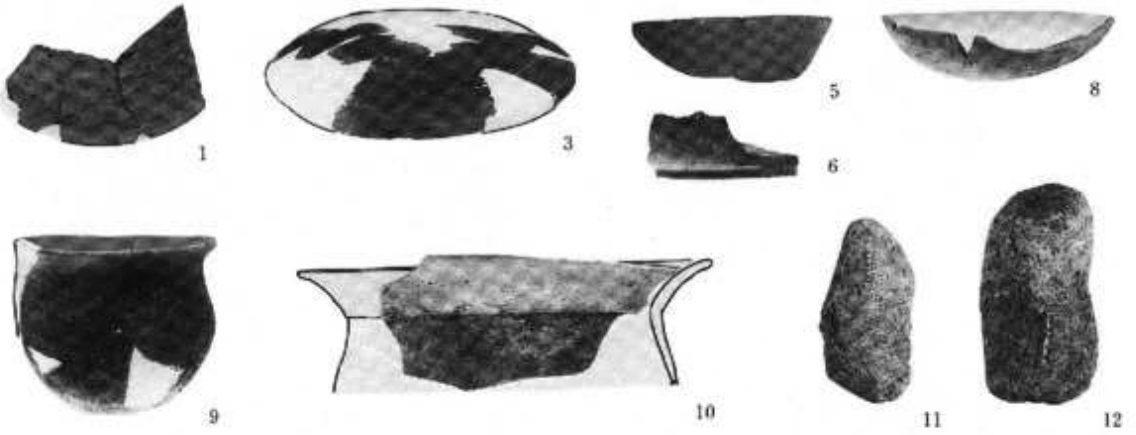


写真95　H25号住居址出土遺物

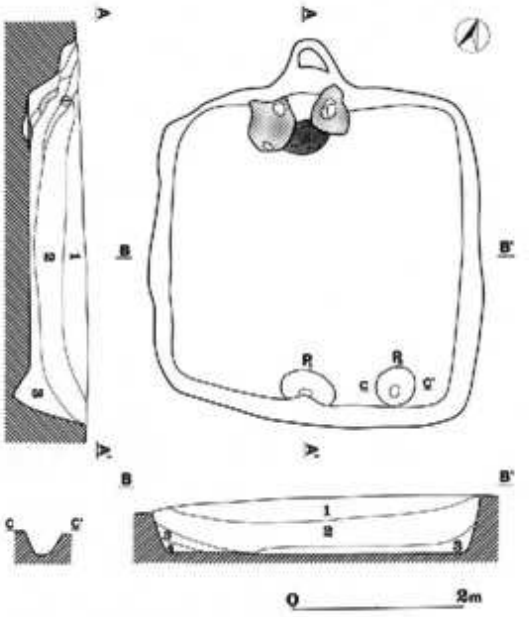
(24) H26号住居址　　平安時代

H26号住居址は、第Ⅰ区Lか・き7グリッドに位置し、検出面は第Ⅲ層である。

平面形態は、南北4.0m、東西3.9mの隅丸方形を呈する。床面積は11.1㎡を測る。主軸方向はN—17°—Wを指す。壁体は上部が第Ⅲ層と第Ⅳ層で、下部が第Ⅴ層である。壁高は、検出の際に北西隅を第Ⅳ層まで掘り下げたため（北西隅上部形状の歪みはそのことに起因する）、西壁では浅いが、東壁では70cmを測る。周溝は存在しない。

ピットは、南壁中央に接してＰ１、その東脇にＰ２が検出されたが、主柱穴と考えられる明確なピットは確認されなかった。Ｐ１は30×63cm、深さ18cm、Ｐ２は47×45cm、深さ27cmを測る。

住居覆土は、４層の堆積が観察された。１層はパミス・ローム粒子を僅かに含む黒褐色土、２層はパミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土、３層はパミス・ローム粒子を僅かに含む黒褐色土、４層は西壁際床面にみられた暗褐色土である。



第104図　H26号住居址実測図（１：80）

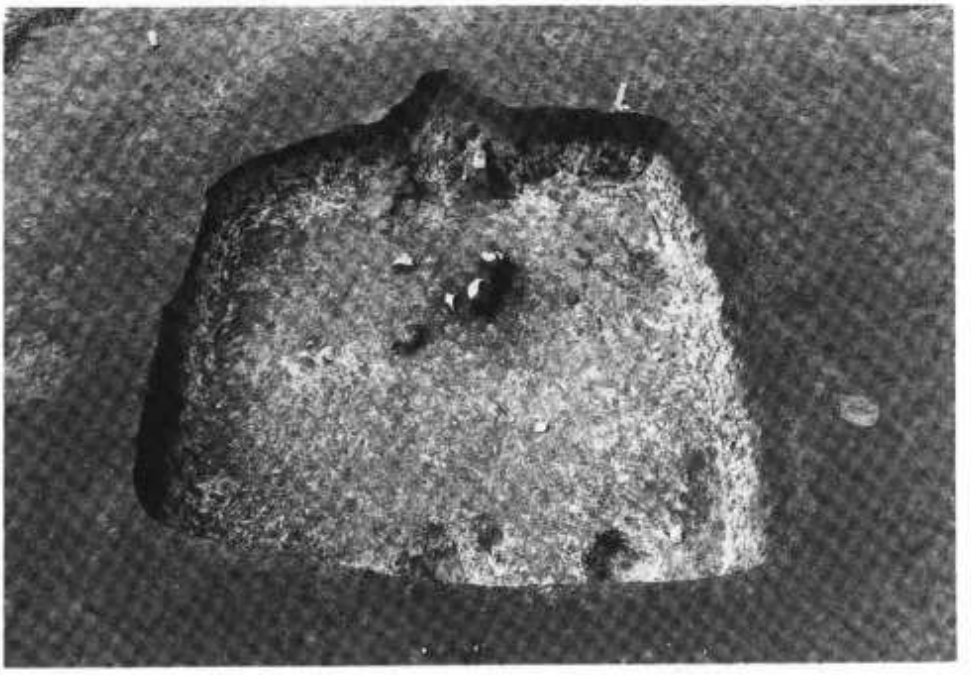
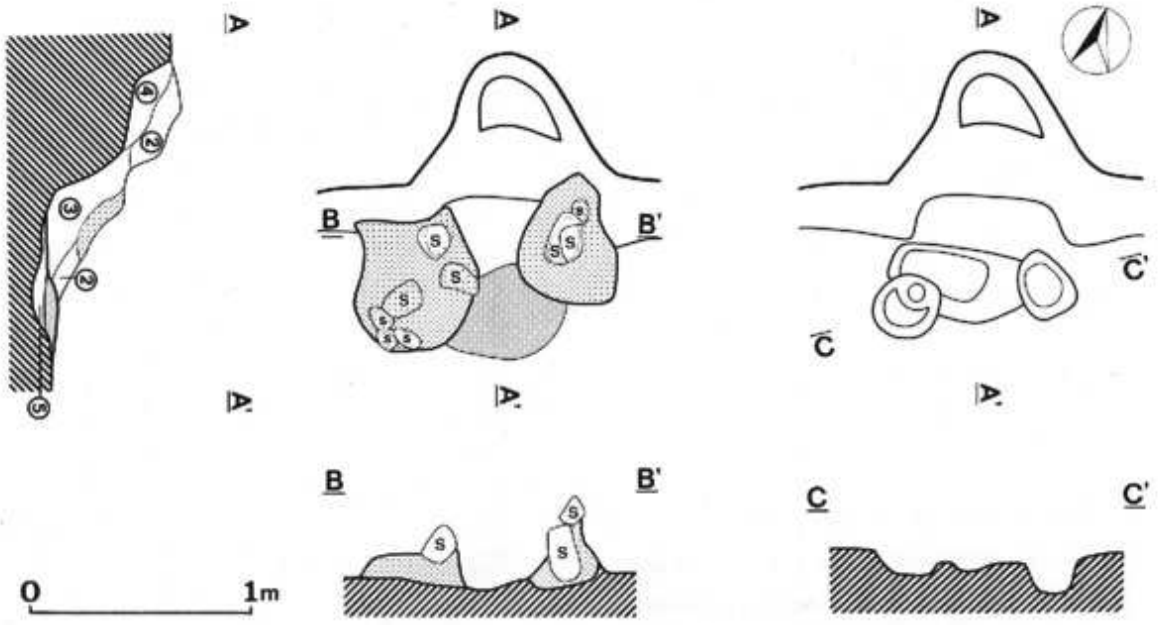


写真96　H26号住居址



第105図　H26号住居址カマド実測図（1：30）

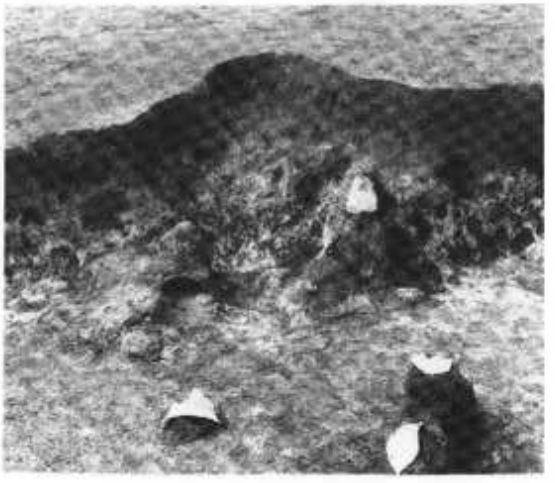


写真97　H26号住居址カマド

カマド

カマドは北壁中央部に位置する。

煙道部は、段差をもって半円形状に掘り込まれ、燃焼部奥壁は、長方形状に掘り込まれている。

袖部の構築は、ピット状の掘り込み、面取りした軽石の配置、橙色粘土による整形の過程が一部伺えた。火床面は楕円形の掘り込みの後、褐色土（⑤層）の充填で形成されていた。

覆土は、上面に橙色粘土が流出した橙色粘質土（①層）、住居址覆土3層の堆積、橙色粘土ブロックを多く含む褐色土（②層）、炭化物片・灰を含む橙色粘質土（③層）、煙道部に黒褐色土（④層）がみられた。

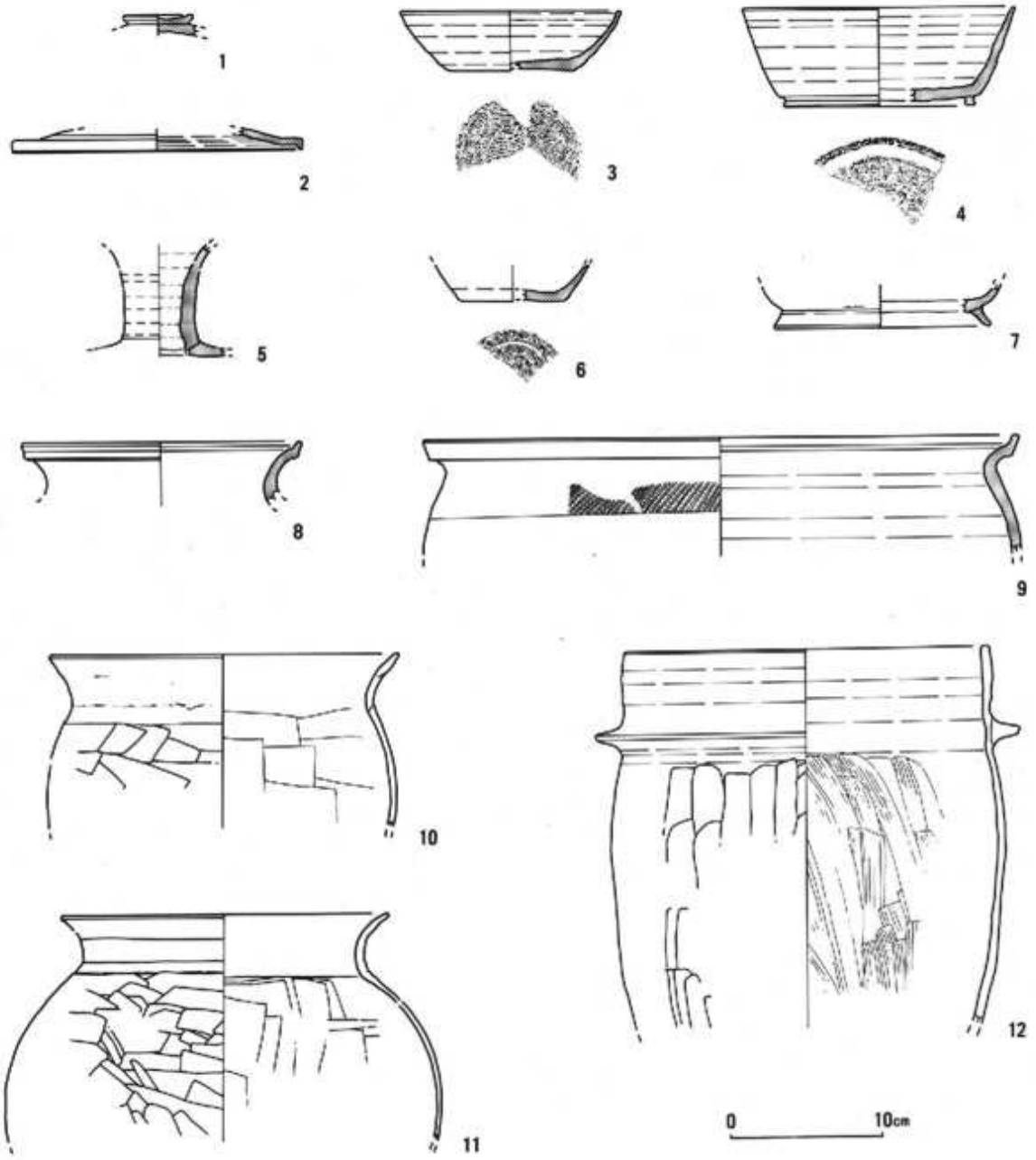
遺物

検出された主要遺物は、須恵器蓋・坏・長頸壺・甕、土師器甕・羽釜、敲石、刀子である。

1・2は須恵器蓋で、1の皿状つまみ部はⅡ区1層から、2はⅡ区3層から出土している。

3は回転糸切り未調整の底部をみせる須恵器坏で、カマド③層から検出されている。

4は口径が大きく器高が高い須恵器高台付坏で、1・Ⅲ・Ⅳ区2層に破片分布がみられた。



第106図　H26号住居址出土土器（1：4）

5は須恵器長頸壺頸部破片で、Ⅳ区1層出土。

8・9は須恵器甕の口縁部で、頸部のしまる8は1区2層、広口の9は住居中央部近くの床面から検出されたものである。

10は土師器長胴甕で、11は「コ」の字状口縁を呈する土師器球胴甕。10はカマド①・②層に破片が分布していたもので、11はカマド②層とカマド手前の2・3層に破片が分布していたものである。

12はロクロ成形による土師器羽釜で、カマド②・③層から検出されている。

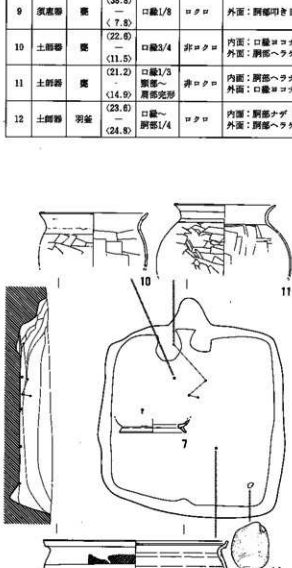
13は刀子の破片で、1区2層から出土している。

14は南東隅床面出土の敲石で、側縁に敲打痕が観察される。

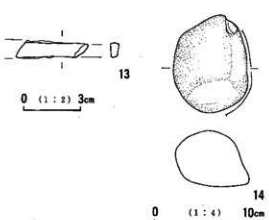
須恵器坏・須恵器高台付坏・土師器甕・羽釜の特徴は、平安時代・九世紀前半の土器様相と思われる。

表41　H26号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	— 4.5 〈1.4〉	つまみ 完形	ロクロ		内面: N6/0 外面: 10Y6/1 断面: N6/0	Ⅱ区1層	
2	須恵器	蓋	(19.0) — 〈1.4〉	口縁1/6	ロクロ	外面：天井部回転ヘラケズリ	内面: N5/0 外面: N5/0 断面: N5/0	Ⅱ区3層	火準あり
3	須恵器	坏	(14.4) 〈8.0〉 3.9	口縁1/8 底部2/3	ロクロ	→底部回転糸切り	内面: 2.5Y5/1 外面: 2.5Y5/1 断面: 2.5Y5/1	カマド③層	火準あり
4	須恵器	坏	(17.7) (12.5) 6.4	口縁1/4 底部1/2	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面: 5PB6/1 外面: 5PB5/1 断面: 5PB6/1	Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区2層	火準あり
5	須恵器	長頸壺	— — 〈7.3〉	頸部1/2	ロクロ		内面: 5Y7/1 外面: 10Y6/2 断面: 5Y6/1	Ⅳ区1層	外面に自然釉付着
6	須恵器	壺	— 〈7.0〉 〈2.4〉	底部1/4	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部回転ヘラケズリ	内面: N5/0 外面: N6/0 断面: N6/0	Ⅱ区2層	
7	須恵器	壺	— 〈14.0〉 〈2.8〉	底部1/8	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面: 5Y6/1 外面: 5Y6/1 断面: 5Y5/1	Ⅱ区床面	
8	須恵器	甕	(18.3) — 〈4.2〉	口縁1/8	ロクロ		内面: 2.5Y5/1 外面: 2.5Y4/1 断面:7.5YR6/3	Ⅰ区2層	
9	須恵器	甕	(38.8) — 〈7.8〉	口縁1/8	ロクロ	外面：胴部叩き目→ヨコナデ	内面: 10YR5/2 外面: 10YR5/1 断面: 10YR5/1	Ⅳ区床面	
10	土師器	甕	(22.6) — 〈11.5〉	口縁3/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：胴部ヘラケズリ →口縁ヨコナデ	内面: 5YR3/1 外面:7.5YR8/4 断面: 5YR5/2	カマド①・②層	
11	土師器	甕	(21.2) — 〈14.9〉	口縁1/3 頸部～肩部完形	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：口縁ヨコナデ →胴部ヘラケズリ	内面: 5YR5/4 外面: 5YR5/4 断面: 5YR5/4	カマド Ⅰ区2・3層 Ⅱ区2層	
12	土師器	羽釜	(23.6) — 〈24.8〉	口縁～ 胴部1/4	ロクロ	内面：胴部ナデ（刷毛状工具） 外面：胴部ヘラケズリ	内面:7.5YR3/1 外面: 5YR6/6 断面: 5YR7/4	カマド ②・③層	



第107図　H26号住居址遺物分布図



第108図　H26号住居址出土石器・鉄器

表42　H26号住居址出土石器・鉄器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
13	刀子	鉄	(3.6)	0.8	0.5	(3.1)	Ⅰ区2層	
14	敲石	角閃石安山岩	10.4	7.9	5.9	680	Ⅳ区床面	

2

3

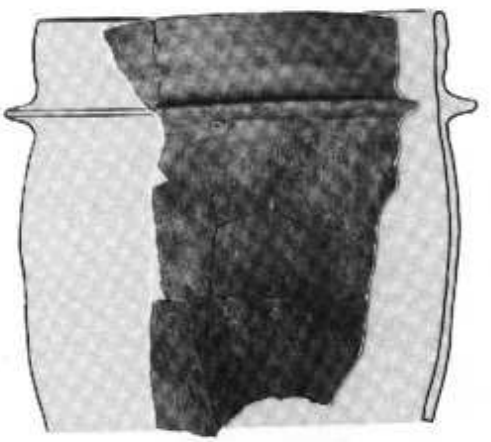
4

5

8

9

10



12

11

13

14

写真98　H26号住居址出土遺物

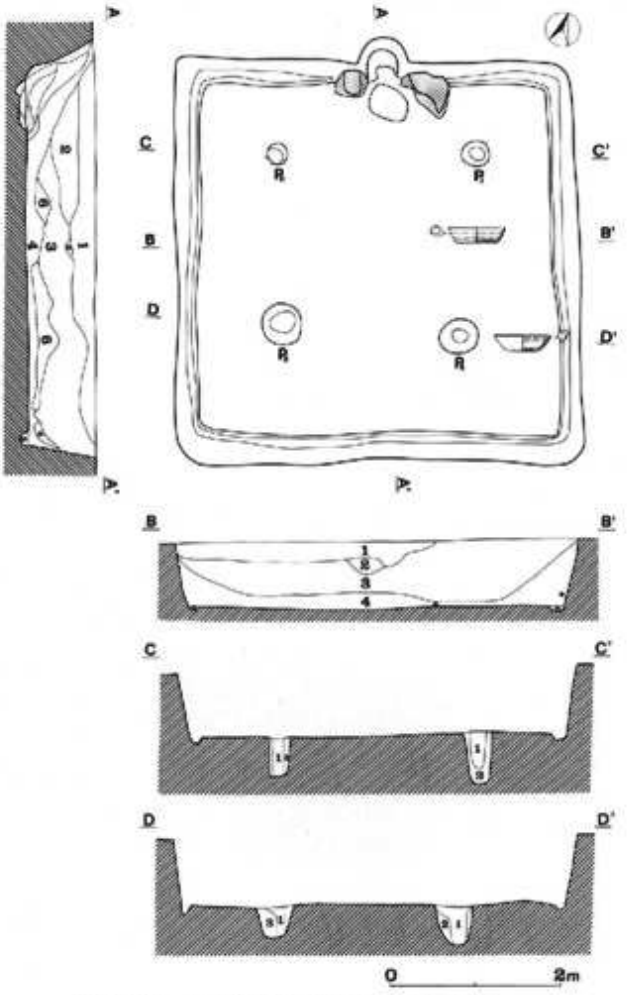
(25) H27号住居址　　奈良時代

H27号住居址は、第Ⅰ区Lい・う5・6グリッドより検出された。

平面形態は、南北4.7m、東西4.7mの規格的な隅丸方形を呈する。床面積は19㎡を測る。主軸方向はN－21°－Wを指す。壁は95度の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は76～86cmである。壁直下に幅8～19cm、深さ4～12cmの周溝が全周している。

主柱穴は、円形を呈する4個が規則的に配置されていた。P1は29×33cm、深さ62cm、P2は25×25cm、深さ45cm、P3は48×46cm、深さ37cm、P4は40×47cm、深さ47cmを測る。なお、径10～20cm程の柱痕が確認された。

住居覆土は6層の分層で示したが、大形のロームブロックが随所にあり、人為的に埋め戻された傾向が伺えた。1層はパミス・ロームブロックを多く含む黒褐色土、2層はパミス・ロームブロック主体の褐色土、3層はパミス・ロームブロックを多く含む暗褐色土、4層はパミス・ロームブロックを多量に含む褐色土、5層は周溝にみられた黒褐色土、6層はロームである。



第109図　H27号住居址実測図（1：80）

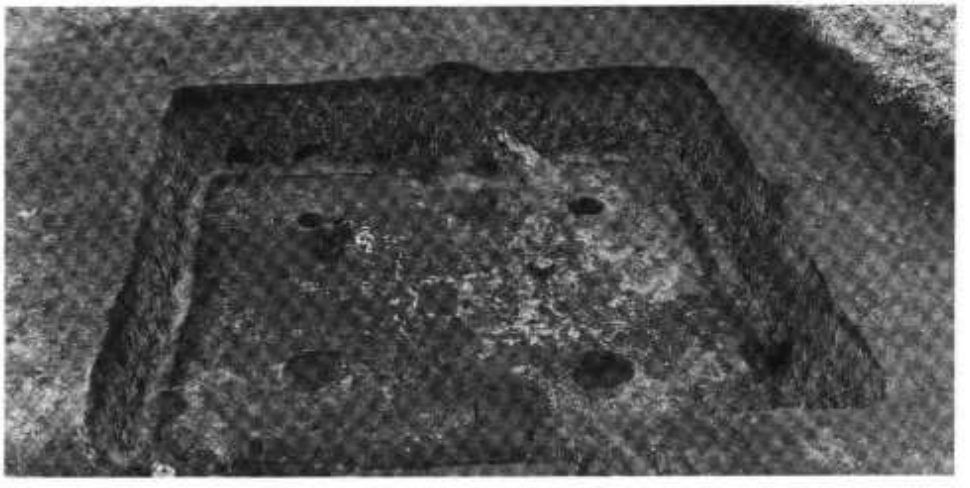
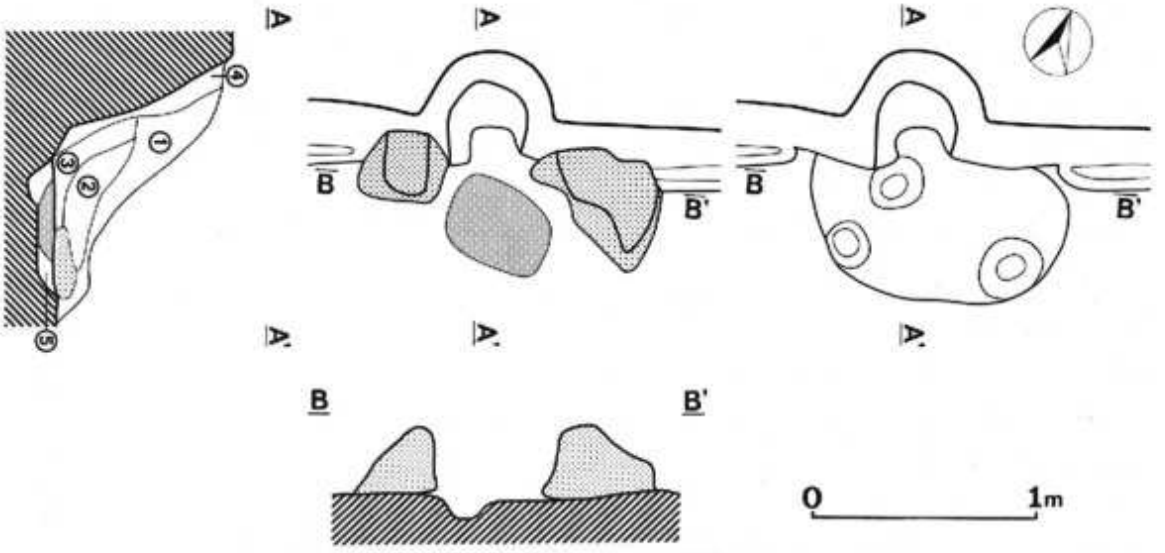


写真99　H27号住居址



第110図　H27号住居址カマド実測図（1：30）

写真100　H27号住居址カマド

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていた。

煙道部の形成は、壁体を角柱状に掘り込んだものである。袖部を構築した橙色粘土が、両袖部の基部に僅かに残存していた。火床部では、楕円形状の浅い掘り込みと小ピット3個が確認された。並存する小ピットは、袖部先端部に位置していたものと思われる。それらの覆土は褐色土（⑤層）であった。

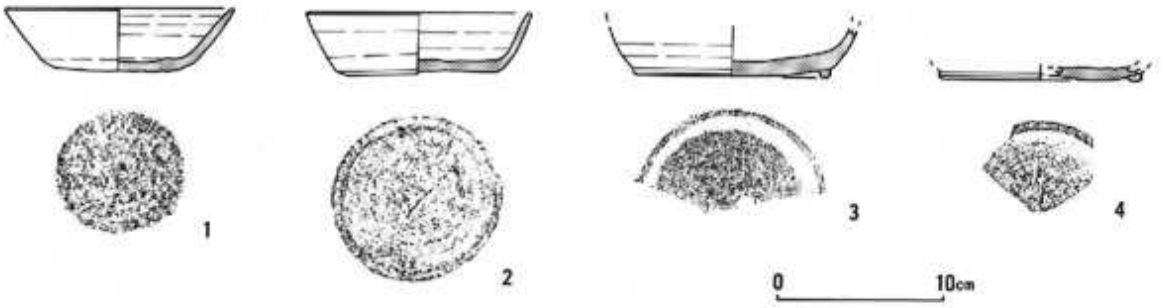
覆土は、灰黄褐色粘質土（①層）、褐色土（②層）、灰黄褐色粘質土（③層）、橙色粘質土（④層）である。

遺物

遺物の出土量は僅かで、主要遺物は、須恵器坏のみである。

1は東壁脇の4層から出土した須恵器坏で、回転ヘラ切りによる底部をみせる。2は住居中央の床面から出土した須恵器坏で、回転ヘラ切りで切り離された後に、回転ヘラケズリで底部が調整されたものである。3・4は須恵器高台付坏の底部破片と思われるものである。3はⅠ区2層から、4はⅠ区3層から出土している。

本住居址検出の須恵器坏は、奈良時代・八世紀第1四半期の土器と考えられようか。



第111図　H27住居址出土土器（1：4）

表43　H27号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.5 7.5 3.8	口縁3/4 底部完形	ロクロ	→底部回転ヘラ切り 外面：底部ナデ	内面：10YR7/1 外面：10Y7/1 断面：10YR7/1	Ⅳ区4層	
2	須恵器	坏	13.2 9.8 3.7	口縁4/5 底部完形	ロクロ	→底部回転ヘラ切り 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：5Y5/1 外面：5Y5/1 断面：5Y6/2	Ⅰ区床面	
3	須恵器	坏	— (11.6) 〈2.9〉	底部2/5	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部ナデ	内面：7.5Y5/1 外面：7.5Y6/1 断面：7.5Y6/1	Ⅰ区2層	
4	須恵器	坏	— (11.9) 〈0.9〉	底部1/5	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台貼付 外面：底部回転ヘラケズリ	内面：N6/1 外面：N6/1 断面：N6/1	Ⅰ区3層	底部外面にヘラ記号

写真101　H27号住居址出土遺物

写真102　土器1出土状態

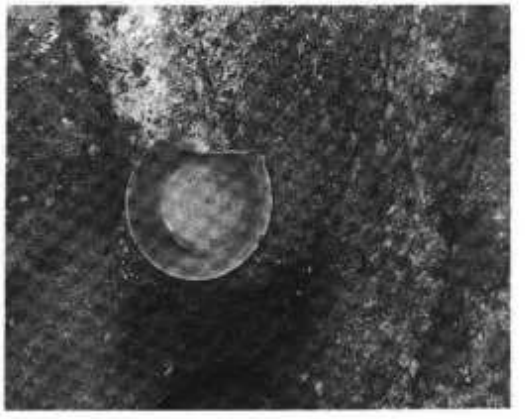


写真103　土器2出土状態

(26) H28号住居址　　古墳時代

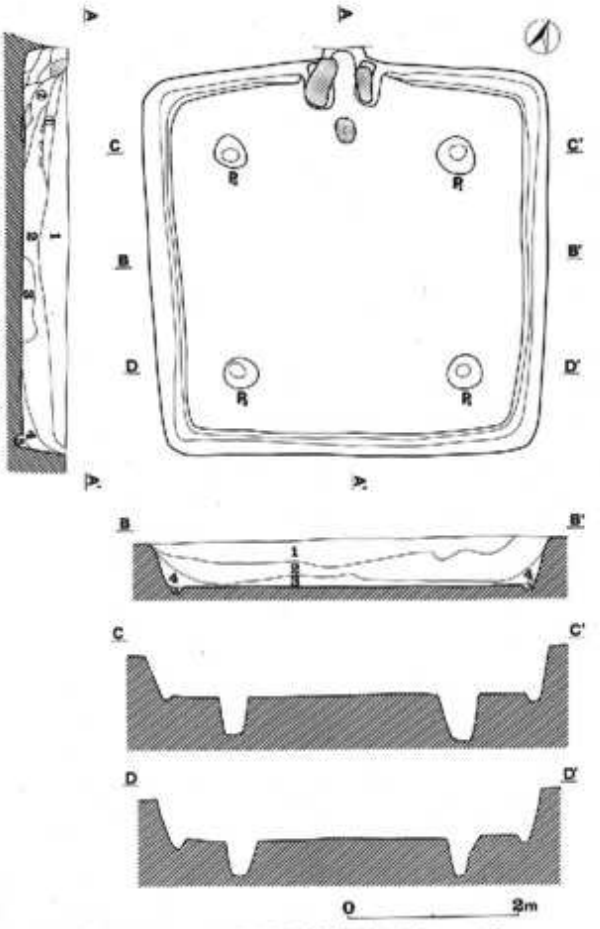
H28号住居址は、第Ⅰ区Lい・う7・8グリッドより検出されている。カマド煙道部がH27号住居址によって切られている。

平面形態は、南北4.7m、東西4.7mの規格的な隅丸方形を呈する。床面積は19.0㎡である。主軸方向はN－20°－Wを指す。

壁は95度程の急傾斜で立ち上がる。確認面からの壁高は50cm程である。壁直下に幅9～23cm、深さ5～14cmの断面U字形の周溝が全周する。

主柱穴は4個（P1～P4）が、やや壁よりに規則的に配置されていた。P1は45×43cm、深さ56cm、P2は41×36cm、深さ46cm、P3は37×41cm、深さ40cm、P4は40×40cm、深さ47cmを測る。主柱穴以外のピットは確認されなかった。

覆土は、周溝をローム粒子を多量に含む暗褐色土（5層）が埋め、黒色土（4層）が壁際を埋める。住居全体は黒褐色土（1層）・パミス・ロームブロックを多量に含む黄褐色土（2層）と、住居中央床面を埋める黒褐色土（3層）の堆積である。



第112図　H28号住居址実測図（1：80）

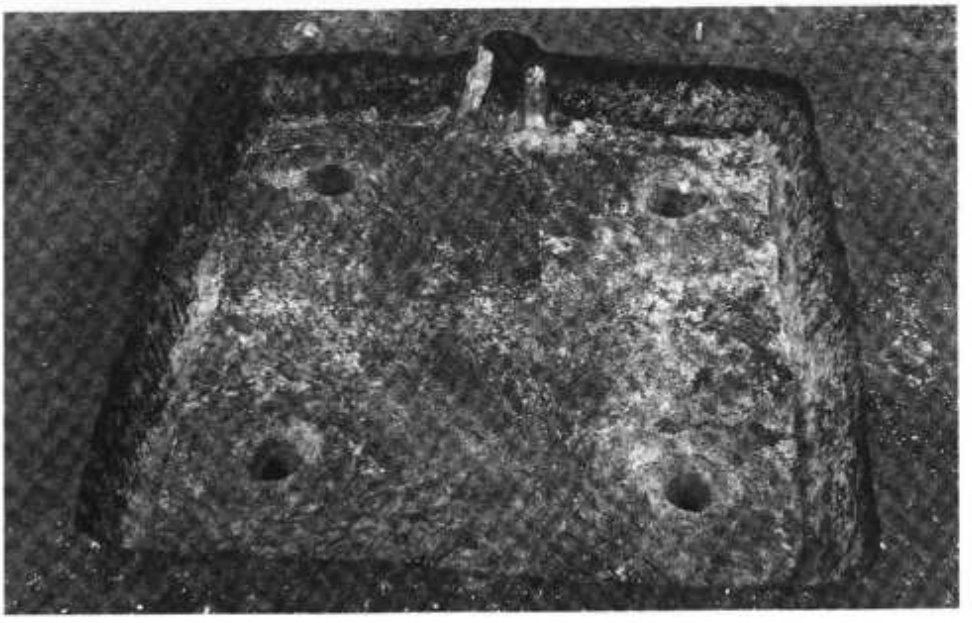


写真104
H28号住居址

カマド

北壁中央部に構築され、煙道部先端がH27号住居址によって破壊されていた。

袖部は、地山を馬蹄形状に掘り残して造り出されたものである。構材は橙色粘土で、両袖部の一部に貼られた状態で残存していた。

カマド覆土は、橙色粘土ブロック・橙色粘土粒子を多量に含むにぶい黄褐色土（①層）と暗褐色土（②層）、炭化物片を含む赤褐色土（③層）、黒褐色土（④層）、褐色土（⑤層）、灰層（⑥層）、橙色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色粘質土（⑦層）である。

遺物

検出された主要な遺物は、土師器坏・壺・甕、編物石・敲石・台石である。

1は底面近くに稜を有する内面黒色処理された土師器坏である。住居中央部の床面から検出されている。

2は土師器壺口縁部と考えられるもので、住居中央部の3層から出土している。

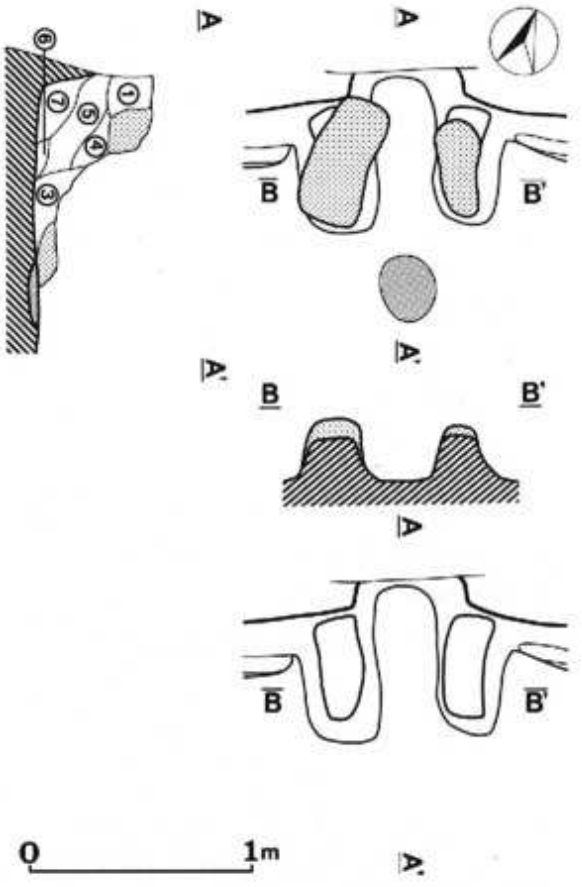
3・7は土師器長胴甕である。3はカマド右脇の②層から検出され、7はカマド内の③層からカマド右脇の②層に破片が分布していたものである。

4は土師器小形甕で、口縁部に刷毛目調整、胴部～底部にヘラケズリが施されている。カマド手前の②層と床面に破片が分布していたものである。

5・6はヘラミガキで調整された土師器球胴甕である。5はカマド内の③層から、6はP4脇の4層から出土している。

8～19は西南隅の床面に密集分布していたものであり、編物石と考えられる。8は両側縁、9～12は一側縁に加工が施され、抉入部が形成されている。平均重量は190gである。20・21はⅠ区の床面から出土したもので、これらも編物石と考えられようか。

22はⅢ区の1層から出土したもので、端部に



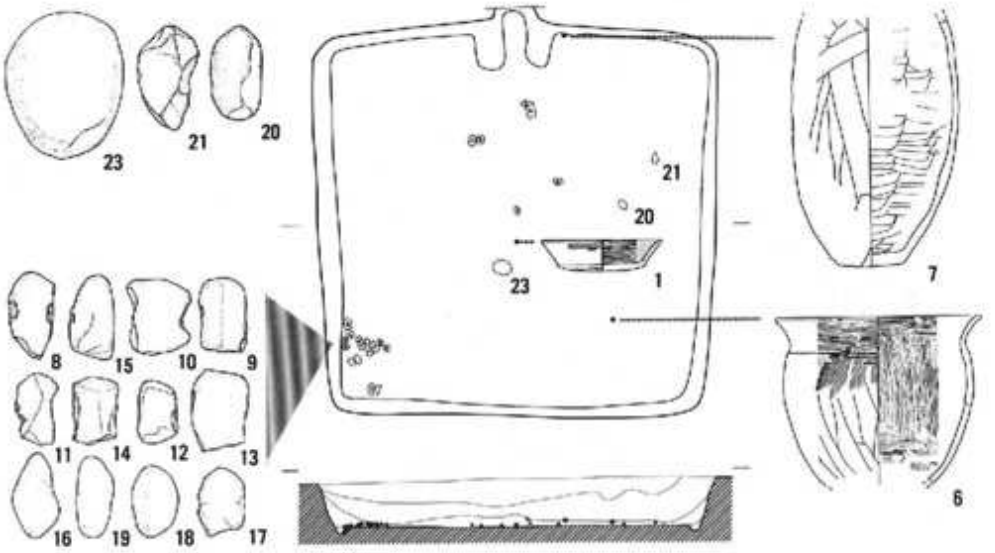
第113図　H28号住居址カマド実測図（1：30）

写真105　H28号住居址カマド

敲打によると考えられる剥離面がみられる。

23は住居中央部の床面にあった台石と考えられるもので、表裏面の平坦面が磨かれた状態を示していた。

本住居址から検出された土器群は、土師器坏・土師器長胴甕・土師器球胴甕の特徴と組成から、古墳時代後期の土器様相と把握される。



第114図　H28号住居址遺物分布図

写真106　編物石出土状態

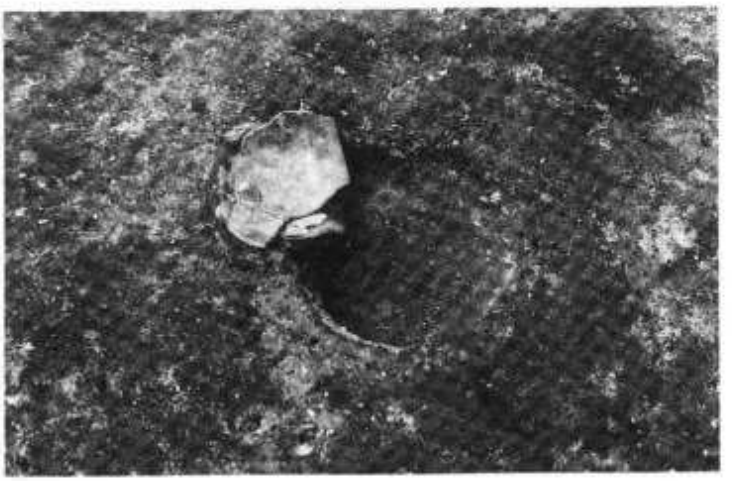
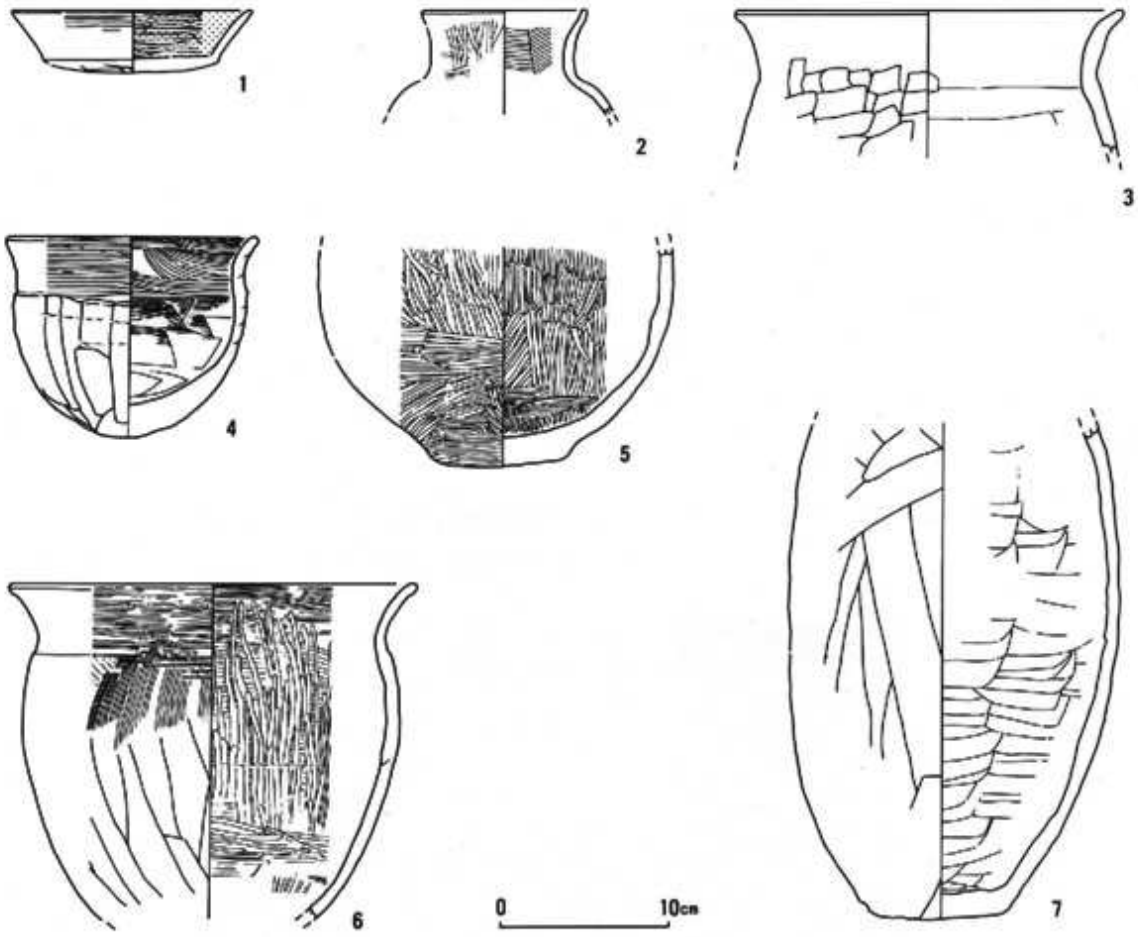


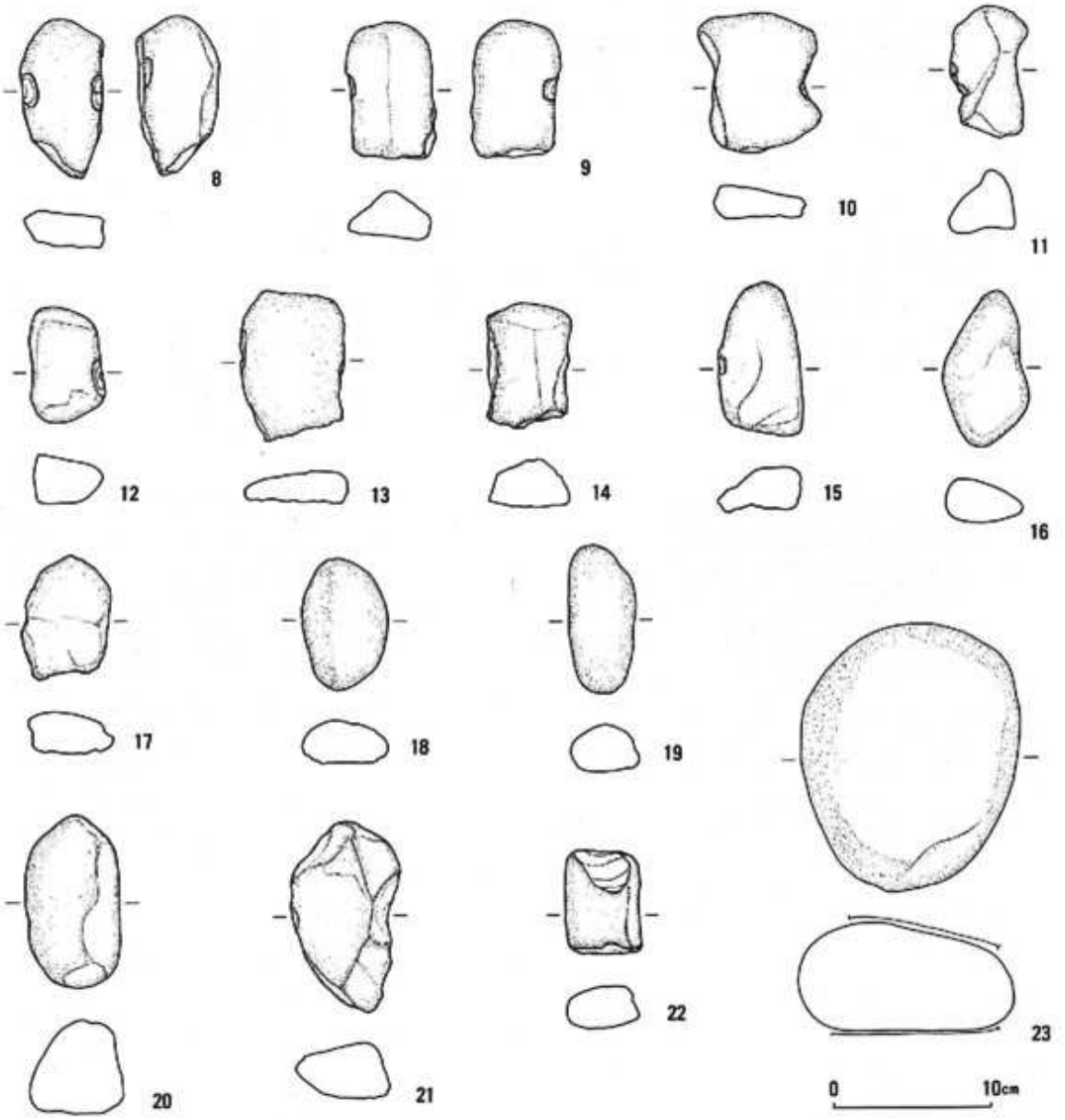
写真107　土器6出土状態



第115図　H28号住居址出土土器（1：4）

表44　H28号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	土師器	杯	(14.1) (10.4) 3.7	口縁2/5 底部完形	非ロクロ	内面：ヘラミガキ→黒色処理 外面：口縁ヨコナデ後ヘラミガキ・底部ヘラケズリ	外面：10YR5/2 断面：10YR7/2	Ⅳ区床面	
2	土師器	壺	(9.7) — (6.3)	口縁一部 胴部完形	非ロクロ	内面：口縁横毛目・胴部ヘラナデ 外面：口縁横毛目後ヘラミガキ	内面:7.5YR7/4 外面:7.5YR7/4 断面:7.5YR7/4	Ⅰ区3層	
3	土師器	壺	(22.8) — (8.7)	口縁1/3	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面:7.5YR7/6 外面:7.5YR7/6 断面：10YR8/4	カマド②層	
4	土師器	甕	14.8 — 11.9	口縁2/3 底部完形	非ロクロ	内面：胴部下半～底部ヘラナデ→横毛目 外面：胴部～底部ヘラケズリ→口縁刷毛目	内面:7.5YR6/4 外面:7.5YR6/6 断面:7.5YR6/6	カマド②層 Ⅱ区床面	
5	土師器	壺	— 7.2 (13.0)	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ	内面：10YR7/4 外面:7.5YR7/8 断面:7.5YR7/6	カマド③層	
6	土師器	壺	(24.0) — (19.9)	口縁1/2	非ロクロ	内面：刷毛目→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面：10YR6/3 外面:7.5YR6/4 断面：5GY4/1	Ⅳ区4層	
7	土師器	壺	— 7.2 (29.4)	底部完形	非ロクロ	内面：ナデ（刷毛状工具） 外面：胴部～底部ヘラケズリ	内面:7.5YR7/4 外面:5YR2/2,7/6 断面：10YR7/4	カマド ②・③層	



第116図　H28号住居址出土石器（1：4）

表45　H28号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考	挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
8	編物石	石英安山岩	10.1	5.4	2.7	200	Ⅲ区床面	両側縁にノッチ状加工	16	編物石	安山岩	10.0	5.5	3.2	180	Ⅲ区床面	
9	編物石	石英安山岩	8.8	5.8	3.1	220	Ⅲ区床面	側縁にノッチ状加工	17	編物石	石英安山岩	7.8	5.8	2.8	165	Ⅲ区床面	
10	編物石	輝石安山岩	9.0	7.8	2.3	200	Ⅲ区床面	側縁にノッチ状加工	18	編物石	石英安山岩	8.5	5.5	3.3	160	Ⅲ区床面	
11	編物石	輝石安山岩	6.5	5.0	4.0	220	Ⅲ区床面	側縁にノッチ状加工	19	編物石	石英安山岩	9.5	4.4	3.8	140	Ⅲ区床面	
12	編物石	輝石安山岩	7.4	4.8	5.9	180	Ⅲ区床面	側縁にノッチ状加工	20	編物石	石英安山岩	11.1	6.1	6.0	520	Ⅰ区床面	
13	編物石	砂岩	9.6	6.7	2.7	180	Ⅲ区床面	厚手剥片	21	編物石	チャート	12.1	7.0	3.6	385	Ⅰ区床面	
14	編物石	石英安山岩	8.0	5.4	3.5	220	Ⅲ区床面		22	敲石	角閃石安山岩	6.1	4.8	3.0	140	Ⅲ区1層	
15	編物石	安山岩	9.8	5.4	3.5	220	Ⅲ区床面		23	台石	輝石安山岩	17.2	13.6	7.0	2520	Ⅲ区床面	両面磨滅

写真108　H28号住居址出土遺物

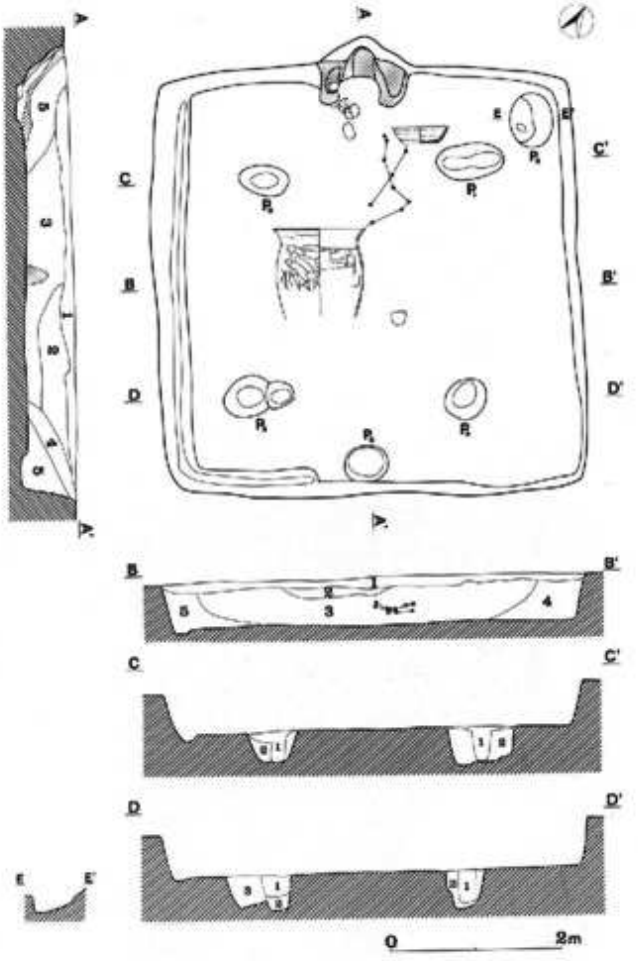
(27) H30号住居址　　奈良時代

H30号住居址は、第Ⅰ区Lあ8グリッドより検出された。

平面形態は、南北5.1m、東西5.0mの隅丸方形を呈する。床面積は21.7㎡を測る。主軸方向はN－32°－Wを指す。

壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は46～58cmである。西壁から南壁の一部に、幅13～23cm、深さ2～12cmの周溝が巡っていた。

主柱穴は、規則的な配置を示す4個（P1～P4）と考えられる。P1の掘り方は長楕円形を呈し、P3は2度の掘り方からなる。P1は43×78cm、深さ46cm、P3は50×50cm、深さ37cmと31×33cm、深さ41cm、P2は36×60cm、深さ37cm、P4は50×47cm、深さ45cmを測る。なお、径16～20cm程の柱痕が確認されている。南壁中央部では、壁に接して42×51cm、深さ9cmのP5が検出されている。出入口部関連のピットであろうか。また、西北隅には、64×51cmの楕円形を呈し、斜めに25cm程掘り込まれたP6が存在していた。



第117図　H30号住居址実測図（1：80）

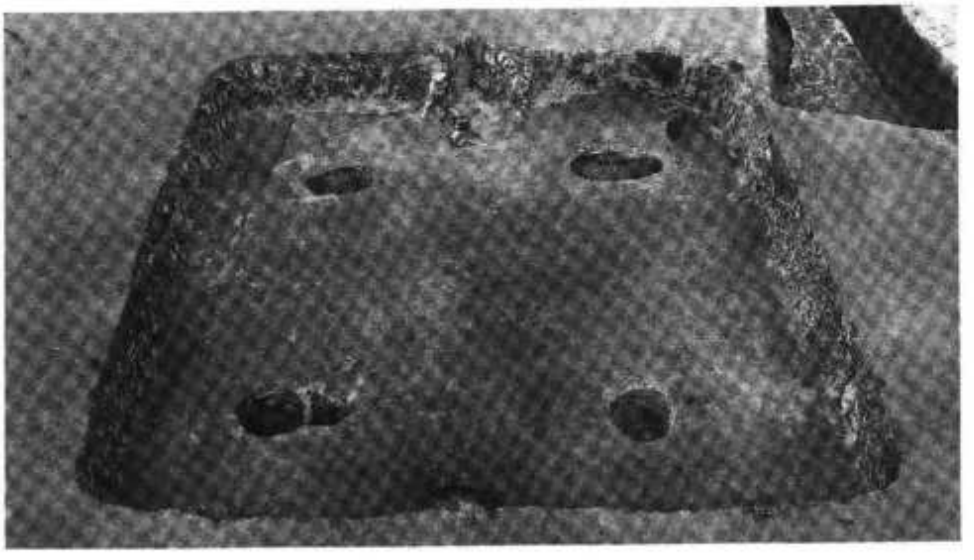
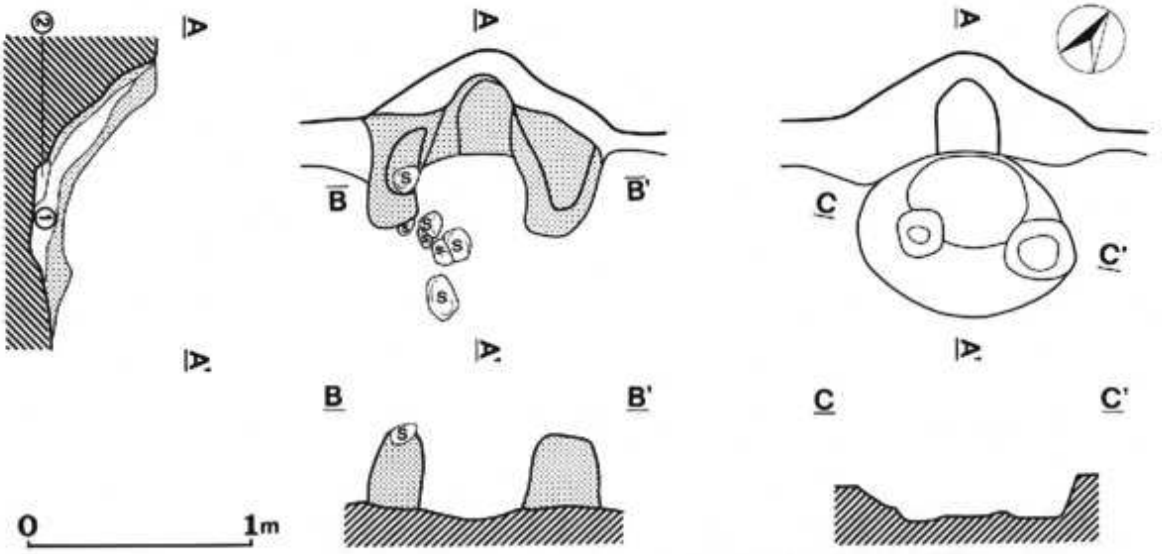


写真109
H30号住居址



第118図　H30号住居址カマド実測図（1：30）

写真110　H30号住居址カマド

住居覆土は、5層に分層された。1層はロームブロックを多く含む黒褐色土、2層はパミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土、3層はパミス・ロームブロックを含む暗褐色土、4層は褐色土、5層はパミス・ローム粒子を多く含む褐色土である。

カマド

カマドは北壁中央部に構築されていた。

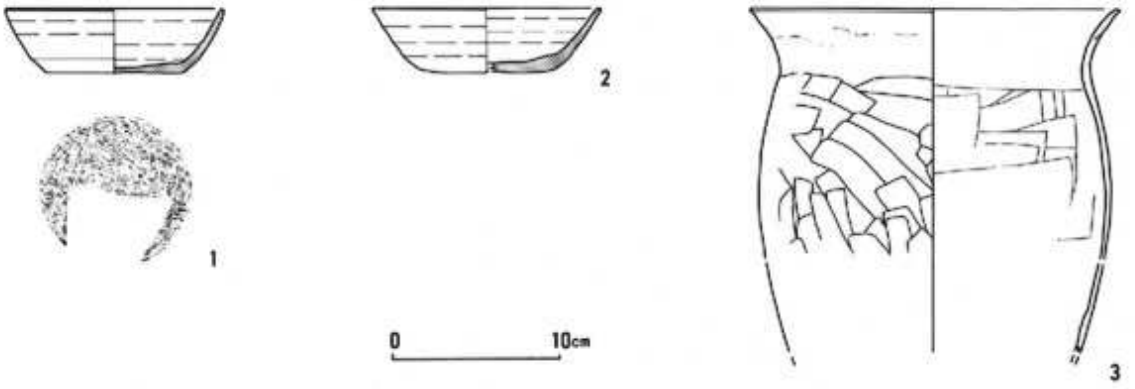
煙道部は、壁体を角柱状に掘り込み、灰白色粘土を貼って構築されていた。袖部は、灰白色粘土を構材とするもので、両袖部の一部が残存していた。また、左袖部では軽石の分布がみられ、芯材として軽石が用いられていた状況が示され、その一部が据えられた状態で検出された。さらに、それに対応して、両袖部の位置に袖石埋め込み用と考えられる小ピットが存在していた。また、火床面には皿状の掘り方がみられた。

カマド覆土は、崩落した構材の灰白色粘土層が上部にあり、その下部に灰黄褐色土（①層）と黒褐色土（②層）の堆積がみられた。

遺物

本住居址から検出された主要遺物は、須恵器坏と土師器甕である。

1は、回転糸切り手法で切り離された後に、底



第119図　H30号住居址出土土器（1：4）

表46　H30号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(13.0) (8.2) 3.8	口縁7/8 底部7/8	ロクロ	→底部回転糸切り 外面：底部周縁および外周回転ヘラケズリ	内面：5Y7/1 外面：5Y7/1 断面：5Y7/1	Ⅰ区3層	
2	須恵器	坏	(13.6) (8.0) 3.8	口縁一部 底部1/4	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部ナデ	内面:7.5YR6/4 外面:7.5YR6/4 断面：N6/0	Ⅱ区1層	
3	土師器	甕	(22.0) — (20.3)	口縁2/3	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面：5YR3/1 外面：5YR6/4 断面：5YR6/4	Ⅰ区3・5層	

写真111　H30号住居址出土遺物

部の周縁および外周が回転ヘラケズリで調整されている須恵器坏である。出土状態は、破片がカマド手前の3層下部に分布していた。

2の須恵器坏は、底部がナデで調整されており、切り離し手法は不明である。Ⅱ区の1層から出土している。

3は、土師器長胴甕である。カマド手前の5層と3層に破片が分布していたものである。

以上のように、H30号住居址から検出された遺物は少ないが、須恵器坏（1）の特徴は、奈良時代後半の土器の特徴を示し、八世紀第Ⅲ四半期で顕著な土器と理解されよう。

(28) H31号住居址　　奈良時代

H31号住居址は、第1区Lい・う9グリッドより検出された。極めて小形であり、一般の住居址とは異なるが、カマドの構築も想定されることから住居址として報告する。

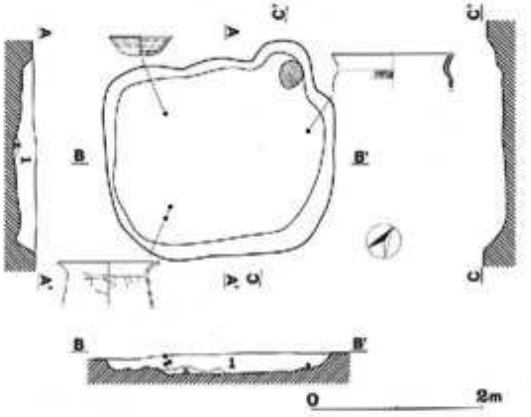
平面形態は、隅丸方形を呈し、南北2.3m、東西2.7m、床面積4.5㎡の規模である。北東隅のカマドと考えられる箇所を基準とすると、主軸方向はN—48°—Wを指す。

壁は140度程の緩傾斜で不安定に立ち上がり、確認された壁高は11～24cmを測るにすぎない。

ピットは確認されなかった。そのため、柱穴の在り方は不明である。また、床面は不安定な状態であった。

住居覆土は、床面中央部でパミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土（2層）の堆積がみられたが、大半はパミス・ローム粒子を含む黒色土（1層）の堆積であった。

カマド



第120図　H31号住居址実測図（1：80）

壁外に設けられた半円形状の掘り込みが、北東隅の位置に存在し、焼土と粘土の分布が確認された。カマドの存在を想定すれば、この箇所が該当しよう。

遺物

検出された遺物には、須恵器坏・甕、土師器甕があった。

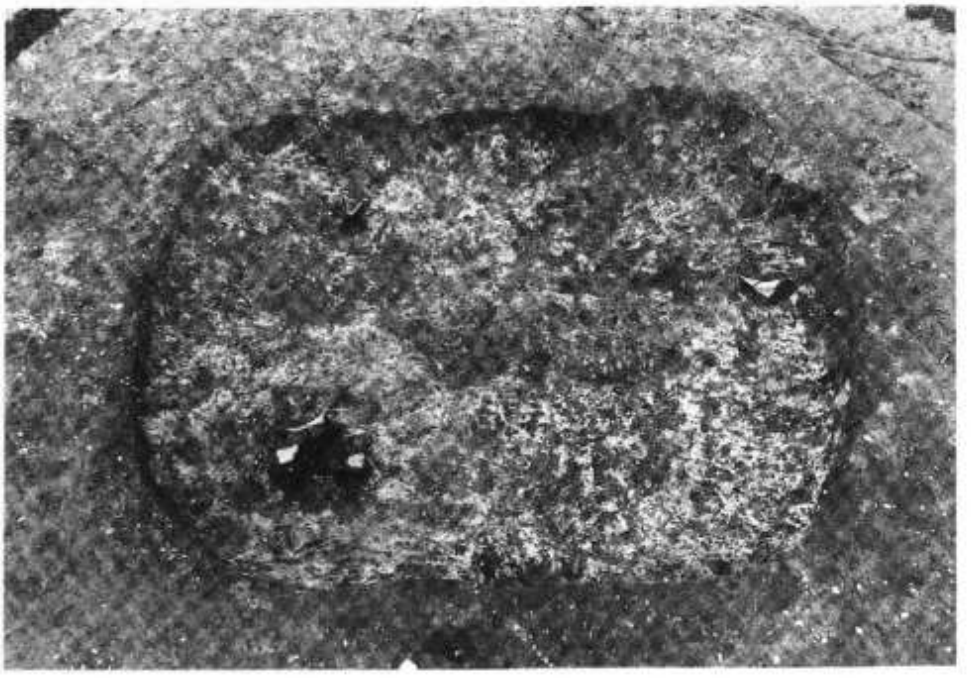
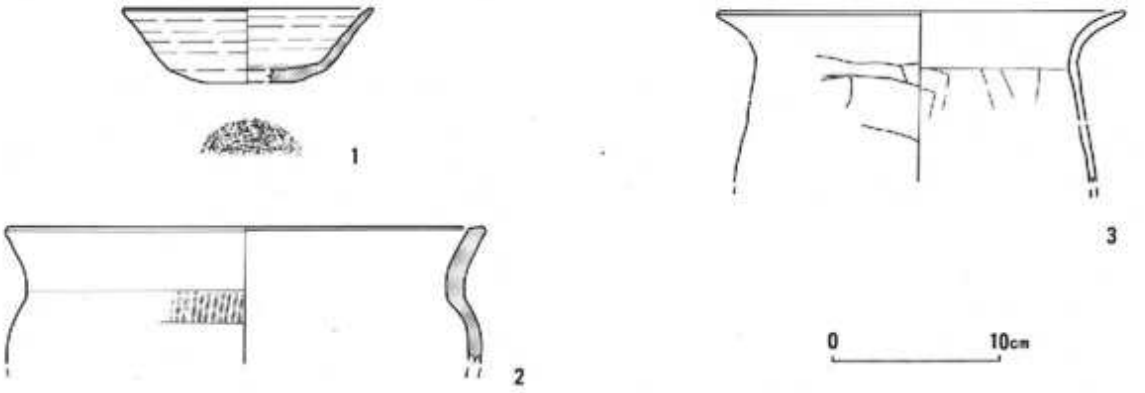


写真112　H31号住居址



第121図　H31号住居址出土土器（1：4）

表47　H31号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(14.8) (6.8) (4.5)	口縁1/8 底部1/3	ロクロ	→底部回転ヘラ切り 外面：底部ナデ（刷毛状工具）	内面:2.5GY5/1 外面:2.5GY5/1 断面:2.5GY5/1	Ⅱ区1層	
2	須恵器	甕	(28.2) — (8.1)	口縁1/4	ロクロ	内面：口縁ロクロナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁ロクロナデ・胴部叩き目後回転ヘラケズリ	内面:7.5YR7/4 外面:7.5YR7/4 断面: 2.5Y7/2	Ⅰ区床面	
3	土師器	甕	24.0 · (10.3)	口縁2/3	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面: 10YR6/4 外面:2.5YR5/6 断面:2.5YR5/8	Ⅲ区1層	

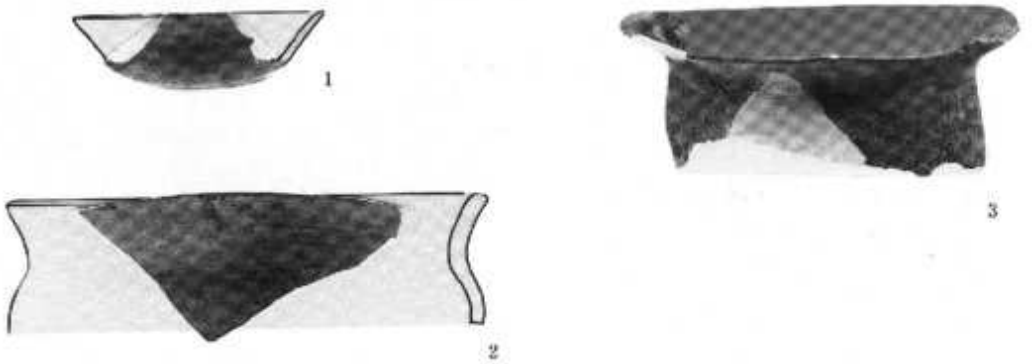


写真113　H31号住居址出土遺物

1は、回転ヘラ切り手法で底部が切り離された須恵器坏である。底部には刷毛状工具を使用したと考えられるナデがみられる。Ⅱ区の1層下部で検出されている。

2は、広口の須恵器甕であり、胴部には叩き目の後に回転ヘラケズリが施されている。東壁脇の床面から検出されたものである。

3は、土師器長胴甕である。口縁部は「く」の字状に顕著に外反する。Ⅲ区の1層上部に破片が集中していたものである。

H31号住居址から検出された土器は少ないが、1の須恵器坏と3の土師器長胴甕は、奈良時代前半・八世紀第1四半期の特徴を示す土器と考えられようか。